

無職転生二次SSまとめ

ミリソ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無職転生二次SSのまとめです。 pivivの方にも投稿しております (<https://www.pixiv.net/users/9762040>)。

目次

もしルーデウス君がお料理上手だったら	1
ロキシ―先生とエリス助手の魔神語講座	6
夫婦会	14
おさかな！	19
ルーシーのお昼寝	24
赤い靴下	28
顔合わせ	32
ララとりボン	35
もう一つの男子会	39
パパはちゅーが好き	45
髪型の由来は？	48
夜に歩く	52
日記	55
ある暑い日	58
暗闇の中で	62
毛刈り一族の陰謀	69
龍神教室	76
寂しがり屋のお母さん	81
証明写真	84
香りに誘われて	87
短編三本	93
入浴剤？	99
夜更けの侵入者	104
くしゅん！	108

しるしを刻ませて

112

通り雨と念話

116

狂剣王の小さな冒険

119

龍神は駄々っ子には勝てぬ

123

もしルーデウス君がお料理上手だったら

「~~~~~♪」

「ごきげんですね、シルフィ」

それはルデイと結婚してからしばらくしての事。ルデイが何故か夜勤と呼ぶ夜の護衛中について嬉しくなつて鼻歌なんて歌っちゃったりしたのだ。

「すみませんアリエル様…お仕事なの…」

「いえ、ただそんなにごきげんなシルフィは珍しいと思っただけですよ」

見ればルークたちも微笑ましいものを見るような目でボクを見ている。なんだよもう…

「それで何か良い事でもあったのですか？」

代表してか、アリエル様がそう尋ねてきた。みんなもなんだかソワソワしてるし…そんなに浮かれてたのかな、ボク。

「あのね…今日はルデイがお弁当作ってくれたんだ！」

お弁当、正確にはお夜食にとボクに持たせてくれたのだ。

「お弁当…ですか？」

「うん、普段は自分で作ってきたけど、ルデイが『シルフィも大変だろうし、お弁当くらいなら俺が作るよ』って！えへへ…」

ボクも嬉しかったけどルデイも張り切って作ってくれたな、ボクのエプロンと三角巾なんて付けちゃってさ。もしかしてルデイって結構お料理好きなのかな？

「べ、弁当か…ルーデウスは見かけによらず器用なんだな…」

なんだかショックを受けてるようなルークは置いといてアリエル様たちの方はまだ見ぬお弁当が気になるみたいだ。

ふふ、ボクもお弁当の中身が気になるし、そろそろ晩御飯の時間だ

…！

「じゃあ取って来るね」

「ん？この部屋にはないのか？」

「うん、ボクの鞆に入れてあるんだ」

ショックから復帰したルークがそう訪ねてきたので答える。相変わらず立ち直りが早い。

それはともかく張り切り過ぎたルデイがちよつとだけ作り過ぎちゃったのでアリエル様の部屋の隣に用意された部屋に置いてあるのだ。ルデイからは謝られたけど気にしてない。

むしろ鞆の中でずっしりと存在を主張するお弁当箱の重みが嬉しかったくらいだ。多かつたらみんなで分けっこすればいいしね。

「じゃ〜ん!!」

「「おお……」」

「随分多いな」

三人分の感嘆と一名余計な事言いの感想を聞いて鼻を伸ばす。

お弁当箱はルデイが土魔術で作った。見た目は地味めだけど軽く頑丈にできてる。ちよつとした魔術教本くらいの大さきのそれが三段分+魔術で温めても大丈夫な器に入れられたスープとパンだ。これだけ有れば朝まで何も食べなくても充分保つだろう、眠くならないようにだけ注意しなきゃだ。

「中を早く見せてくださいシルフィ！」

「そうだな、奴はどんな料理をお前に持たせたんだ？」

二人の急かす声にせつつかれながら蓋を開ける。さあ、ルデイはどんなご飯を作ってくれたんだろう？

〜（食事中）〜

「何故か、敗北した気がします」

「自分もです、アリエル様」

ルデイのお弁当はそれはもう美味しかった。

この辺りでよく獲れる川魚を使ったムニエル。下味のしつかりつけられた四角い卵焼きが中に具が入ってるのに入っていないのと二種類。とろみのあるタレが絡められたミートボール。付け合わせに野菜の和え物と根菜の炒め煮が付いていた。スープはいつもと同じ豆のスープに刻んだ燻製肉が追加されてる。

すごく美味しい。ただちよつと量が多いのがご愛嬌かな、結局みんなにも食べてもらっちゃったや。

なのに、

「みんなどうしたの…?」

ボク以外の全員が肩を落としている。ひよっとして口に合わなかったのだろうか、こんなに美味しいのに。こんなに美味しいのに!

「いえ…それにしても本当に良い方を捕まえましたねシルフィ」

「えっ!？」

捕まえたと言うか捕まえてもらったというかいやそれはどちらでも良いや良くないあわわわわわわ!!

「ふふ、そんなに慌てなくても大丈夫ですよ、取ったりしませんから。それともよろしければまた作って貰って来てください、材料費は出します」

「え?じゃあお口に合わなかったとかじゃなくて…」

「そうだな、ルーデウスに美味かったと伝えておいてくれ」

——ルーデウス視点——

「つて事があつたんだよ」

「そっか」

初めてお弁当を作ってから二日後、彼女の休日にシルフィの作ってくれた美味しい夕飯を頂いた後に二人してソファでまったりしている時にそんな報告を受けた。

いやね?最初はもっと普通のお弁当にするつもりだったんですよ?でも台所で料理してる俺を見るシルフィの目がヤケにキラキラしてたからさ?後ろから『おー!』とか『スゴい!』とか聞こえてくるもんだからついね?張り切ってしまったというかですね?それにしたつてお重はやり過ぎたか。アレじゃお弁当はお弁当でも仕出し弁当みたいだったしな。

まあそれはいい、元手は俺の貯金だし。ちよつとクエスト行けば取り戻せる程度のやらかしだからその程度の苦労は愛しい妻の笑顔の為ならプライスレス。

しかし舌が肥えてるだろう王女や貴族にまで気に入られるとは俺のクツキングスキルも捨てたものではないらしい。

……逆にお弁当という文化が新鮮だっただけという可能性もあるが。

「それでねルデイ、アリエル様も皆もまた食べたいって言ってるんだけど……」

「それくらいお安い御用さ」

材料費は向こう持ちらしいしな。ぶっちゃけ俺の料理は大量生産・大量消費みたいな所があるから量が増える分には問題ない。魔大陸で亀と何食べても美味しいとしか言わない二人相手に四苦八苦した経験が活きるね。

「それじゃあ明日にでもどんな食材が好きか聞いといてくれ……っと、そうだった。シルフィはどんなのが好きなんだ？」

「ボク？どうして？」

今アリエル様たちの話してたんじゃないの？と首を傾げるシルフィ。実に可愛い。

「どうしてって……元々シルフィのお弁当なんだし、俺が一番喜んで欲しいのはシルフィだからだよ」

「そ、そそそそうだね！ボクの為に作ってくれるお弁当だもんね！」

えーっと、えーっと、と言葉を探しながら俺の腕の中で耳をパタパタさせるシルフィ。とても可愛い。

「どれも美味しかったけど……あのミートボールはまた食べたいかも」

「ミートボールか、分かった」

はじめてのお弁当だしナナホシがやってるみたいにくっちでもどうにかかなりそうな定番を攻めてみたが、上手いこと琴線に響くのがあって良かった。

「んふふ……」

「ん？どうしたのシルフィ」

「ううん、こんな話してると改めて思うんだ。ボク、ルデイと一緒になれて幸せだなあって」

「……俺もだよ、シルフィ」

「あ、そうだ。今度ボクにもルデイのお弁当作らせてよ、今回のお礼にさ」

それでピクニックにでも行けたら楽しそうだよね、と嬉しそうにはにかみながら俺の胸に顔を埋めるシルフィ。最上級に可愛い、そろそろ辛抱たまらん。辛抱する必要もないか。

「そろそろお風呂入ろうか」

「えっもうそんな時間!?!」

「ううん違うよ。違うけど、嬉しそうにご飯の話してくれるシルフィを見てたら、俺がシルフィを食べたくなっちゃった」

そう宣言して、俺は顔を真っ赤に染めたシルフィをお姫様抱っこして浴室へ直行した。

次回のお弁当はアリエルたちのリクエストの他にシルフィが好きなのが満載されたお重四段盛りになるだろう。あ、そのうちシルフィモチーフでキャラ弁とかもいいかもしれないな。シルフィが照れてる顔が目には浮かぶ様だぜ。

ロキシシー先生とエリス助手の魔神語講座

『そしたらララが「次はバレないようにする」って』

『あの子はまた…』

ルーデウスが半月ほどの出張で不在のルーデウス邸、その昼下がりに揃って仕事が終わったロキシシーとエリスは魔法大学ではなく自宅で昼食をし、食後にお茶話をしていた。議題はすすくと成長中の子ども達についてである。と、そこへ

「二人とも何の話してるの?」

自分用のお茶と二人へのお代わりを持ってきたシルフィがやってきた。

しかし二人が話していた内容は聞き取れなかった様子。テーブルから台所は遠くて聞き取り辛かったのか、単純に別の作業をしていたから聞き逃してしまったのか。

しかし二人はシルフィはその程度の事で会話を聞き逃すひとではない事を知っている。知っているので不審にも思う、もしかして体調が悪いのではないかとまで考えたわけではないがとにかく不審に思った。

「…子ども達の事よ」

「…あ、違いますよエリス。自然すぎて忘れていましたが今わたしたち魔神語で話してました」

そこでロキシシーが気づいた。そう、二人は魔神語で話していたのだ。

時折エリスはロキシシーにたまに話しておかないと忘れそうだからと魔神語で話しかける事がある。タイミングはいつも唐突だがロキシシーも魔大陸出身、自然とヒアリングし魔神語で会話を続ける事くらいはできる。

大抵は二人しか居ない時に起きるイベントだが今は食後で昼下がりに、いかなエリスと言えど気が緩んでしまったに違いない。

「あ、だから分からなかったのか。エリスがララの声真似してるのだけは聞き取れたんだけどね」

「や、やめてよ恥ずかしい」

「いいじゃないですか、可愛かったですよエリス」

「ロキシーまで…っていうかシルフィは魔神語話せないの？」

「うん、ボクは魔法大陸の方に行く機会が無かったからね」

魔法大学にもOGであるロキシーや一時期だけ居たバーデイガーデイらが居る事から明らかかなように魔族の生徒も在籍している。しているのだが大抵は魔法大学に来るまでに人間語を習得しているのもで魔神語で誰かとコミュニケーションを取る機会は無いまま卒業を迎え今に至る。

「ならわたしが教えましょうか」

「え、いいの!？」

「もちろんですよ。ちょうど今日が定例会議の日でしたし、昔作った教科書の試作品を持っていきますね」

ルーデウス邸、寝室。昼間は元気な子ども達もすっかり寝静まった時間帯に三人の女子が膝を突き合わせていた。普段ならアルコール類やツマミが握られている手には今日に限っては束ねられた紙とペンを握られ、さながら深夜の勉強会の様相を呈している。もし仮にルーデウスがこの場に居れば違う意味で深夜の勉強会になるだろうが不在なので問題はない。ないったらない。

「シルフィ、準備は良いですか？」

「はい先生、よろしくお願いします」

「よろしいでしょう。ではまず新入生のシルフィにはこちらを進呈します」

そう言いながらロキシーが手渡したのはもう20年近く前にルーデウスに贈った魔神語の辞典とほぼ同じものだ。彼が持っていた原本は転移事件で消滅したが著者であるロキシーの手元には下書きが残っていたので急遽それを手直した次第である。

「わ…：：：ありがとうロキシー!」

「いえいえ、いつも家の事をしてくれているお礼と思ってください。エリスも書くのを手伝ってくれたんですよ」

「本当!? エリスもありがとう!」

「べ、別に大した事はして無いわよ!」

ふん、とそっぽを向いてしまったエリスの耳は髪と見紛うほど真っ赤に染まっていたが、それを指摘するほど二人は野暮ではない。ただエリスは可愛い（です）ねと思うに留める。

「それでどうするの?」

「まずはその辞書を使って基本的な発音と語彙を覚えましょう。ある程度出来るようになったら次はわたしやエリスと魔神語で話して会話のテンポを掴みます。シルフィは物覚えが良いですからきつとすぐに簡単な会話くらいなら出来る様になりますよ」

「『こん、にち、わ』?」

「そうそう、そんな感じです」

『私の、名前は、エリスです』、何て言ったか分かる?」

「ええっと…私の名前はエリスです?」

「すごいじゃない!」

シルフィは小一時間で辿々しくではあるが、ごく簡単な魔神語の発音と聞き取りができるようになっていた。読み書きにはまだ辞典が必要だが文字を覚えてたの時はそんなものだろう。

「うう…思ってたより難しいや」

「ちよつとの練習で喋れるようになった人が何を言ってるんですか。後もう少し練習して、明日からエリスがやってるみたい到时々魔神語を使って話してみると良いかもしれませんね」

「私でもロキシーでも良いわよ!いつでも受けて立つわ!」

「ふわあ…」

大きな欠伸をあげながら部屋から出てきたのはエリスである。今日は仕事も無いから一日ゆっくりと子ども達の面倒を見れる、手始めに朝食が終わったら散歩に行こうと思いつながらエリスが階下に降りると、シルフィが朝食の支度をしていた。

「エリス、おは…あ。ええっと…『おはようございます』」

『ええ、おはよう。いい朝ねシルフィ』

「はい、おはよう、いい朝ですね、シルフィ？」

「そんな感じね！」

エリスが私がシルフィに何かを教えるなんて新鮮ね！と感慨に浸っていると今度はロキシシーが降りてきた。寝癖が付いている辺り彼女もまた寝起きのようである。

「おや、早速練習ですか。感心ですね」

『『おはようございます』……出来てる？』

「出来てますよ、おはようございますシルフィ。昨日よりもスラスラ言えてますね」

「寝る前にちよつと練習してから寝たからね。ルデイが昔言ってたけど寝る前に勉強すると早く覚えられるんだって」

「家庭教師をしてた頃にもそんな事言ってたわね：どこで覚えたのかしら」

「ルデイはまだまだ謎が多いですね……」

と二人が首を傾げていると、

「ママたちなんのお話してるの？」

いつの間にか足元に長女ルーシーが居た。三人が見ればアイシヤにアルスが纏わりつきレオの上でララが二度寝を決め込もうとしている。いつの間にか子どもたちの多くが起きてきたらしい。

「ごめん二人とも、みんな起きてきたし朝ごはん仕上げちゃうから皆の事お願いできる？ごめんねルーシー、すぐご飯できるからね」

「わかったわ」

「分かりました。ほらララまた寝ちゃダメですよ」

そう言っただけロキシシーはレオの上でうつらうつらしているララを起こしに行った。そうなればルーシーの疑問に答えるのは自分の役目だろうと、エリスはルーシーに向き直る。

「ねえ赤ママ、さっき白ママとなんのお話してたの？」

「聞こえてたの？」

「うん、でもなにをお話してるのか分からなかった」

「魔大陸って所の言葉で「おはよう」って言ったのよ」

「またいりく？青ママがずっと昔に住んで、パパと赤ママとルイ
ジェルドさんが旅してたところ？」

「そうよ、よく知ってるわね」

「前に青ママがお話ししてくれた、ご飯が美味しくないって」

「そうだったかしら…：そういうえばルーデウスは微妙な顔してたわね
…」

「それで、どうしてママたちはまたいりくの言葉でお話してたの？」

「白ママのお勉強よ」

「お勉強？なんで？」

「特に理由があるわけじゃ無いと思うけど…：でも大切な事よ」

だからルーシーも魔術も勉強も剣の修行も頑張んなさい、とエリス
が締めくくったところでシルフィの号令がかかった。朝食の準備が
整ったのだ。

「ねえ赤ママ、またいりくの言葉でいただきますってなんていうの？」

『『いただきます』って感じね、でも私に聞くより青ママかパパに聞い
た方が分かりやすく教えてくれるわよ』

「うん、でも赤ママにも聞きたい」

「そう、ならたまにね」

「わかった！」

ルーシーの言葉に顔がニマニマしてくるのを抑えるのに必死なエ
リスであった。

その後数週間、家事の合間を縫って二人から魔神語を習ったり、自
主練に励んだ成果としてルーデウスが帰ってくる前日にはシルフィ
は簡単な単語による会話ならつかえる部分こそあれど出来るよう
になった。魔神語で書かれた本も時々辞書を引きながらではあるが
読めるだろう。

「うう、緊張するなあ…」

（応援しか出来ませんが頑張ってくださいシルフィ！）

（ルーデウスがどんな顔をするか楽しみね！）

そしてルーデウス帰宅の日、ロキシシーの立てた作戦に基づき玄関前

で待ち構えるシルフィと近くの部屋から様子を窺う二人。作戦とはこうだ。

①シルフィが出迎える。

②魔神語で『おかえりなさい』と言った後しばらく魔神語で会話をつなぐ。

③ルーデウスは「いつの間に魔神語を!？」と驚き喜びシルフィは努力の成果を披露できる。

という筋書きである。

「ただいま〜」

ルーデウスの帰宅と共に、決戦の火蓋は切って落とされた。

『お、おお、おかえりなしいルデイ!!』

(噛みましたね)

(噛んだわね)

「シ、シルフィエツトさん…?え?聞き間違い?」

「あ、あわわえつとえつと…『おかえりなさいルデイ、お風呂にする? ご飯にする?それともボク?』」

「…シルフィ、もしかして魔神語で話してる…?」

『う、うん。ルデイをびっくりさせたくて、ロキシーとエリスに教わったの』

「シルフィ…!」

と帰ってきて早々いい雰囲気になりつつある二人を尻目に

(いい流れですよシルフィ!)

(ちよ、ロキシー声が大きいわよ!なんでそんなに興奮してるの!?)

(おつと危ない、覗きは良くないですね。でもバレなきや良いんですよ)

(ララとおんなじ事言ってるわよ…)

(まあいいじゃないですか、今日は元々シルフィの日なんですし、流石に寝室まで覗きませんから)

(ならいいわ)

『でもすごいじゃないか、もうそんなに魔神語話せるし聞けるなんて。習い始めてそんなに経ってないだろ』

『うん、けど先生が良かったんだよ。ロキシーもエリスもさ』

『シルフィが努力家だから二人も熱が入ったんだよ』

『そうかなあ』

『そうさ、後でお礼言わないとな』

『うん。あ、そこに居るよ?』

(あ、言っちゃうのねシルフィ)

(最後まで黙ってるつもりなのかと思いました)

『そうなの?』

『そうなのですよ』

そう返事をしてロキシーが部屋の扉を開けて登場する。その後ろにはエリスも。

『二人とも本当にありがとう…!』

『シルフィは大袈裟ですね』

『気にする程じゃないわ』

魔神語で仲睦まじく会話を繰り返り広げる三人を見て出張疲れのルーデウスは自分の心が温かい物で満たされていくのを感じる。そう、これこそがパライソなのだ。よしこのまま四人でお風呂入れたりしないかなあなどと目論んでいたりもする。

そんな夢と欲望を口に出そうとした瞬間、

「あ、パパだ! えつと… 『おかーりなさい』?」

玄関からの物音を聞きつけてかルーシーがひよこつと顔を出した。やや拙いながらも魔神語でのおかえりなさいを添えて。

「…ルーシーまで!？」

「あ、ルーシーに聞かれたから鍛錬の合間に単語だけ教えたわね」

「おやいつの間に。勉強熱心で偉いですねルーシー」

「えへへ…」

「良いところを全部持つてっちゃうんだから…ルーシーには敵わないなあもう」

そう言いながらルーシーを抱き上げるシルフィの顔と手つきは優しい。別に怒っているわけではないので当然ではあるが。

結局そのままルーシーたちと一緒にダイニングに入り、夕食をいた

だく事になったルーデウスは夢と欲望を言いそびれた。出張の話を
せがむ愛しい子どもたちには勝てなかったのだ。

その後、時々だが妻たちへ魔神語で愛を囁くルーデウスの姿があつ
たり、新装版ロキシー辞典を片手にパパとママたちに話しかけてみた
りするルーシーの姿があつたりした事が将来のルーデウス邸における
語学教育にどれほどの影響があつたのかはロキシーでもモザイク
でもない神のみぞ知る…。

夫婦会

唐突だが酒の話をしよう。我が家で最も酒に弱いのは誰だろうシルフィである。いや酒に弱いというより酔い方が激しいタイプだな。甘え上戸になつて大変可愛らしい。

逆に一番強いのはエリスだ、酔うと多少考え込んで無口になるくらいで殆ど変化がない。しかし普段より鋭い眼光は真つ直ぐに俺の心臓を撃ち抜きに来る、まるで恋泥棒だ。

そして俺はその中間。多少饒舌になつたり飲み過ぎれば多少前後不覚にもなるが何かをやらかす程でもない。ハズだ、多分。きつと。

ちなみにロキシ―はそれほど飲まない。この辺りで好まれる強い酒は我が神の嗜好品ではないらしい。強い酒よりも弱めの、アスラ王国辺りで好まれる甘めの酒が好きみたいだ。

これはそんな俺たち四人のある日の晩酌のメモリーである。

「ルーデウス、受け取れ」

「…?なんですかこれ、酒瓶?」

「アリエルだ」

アリエルだ。だけ言われても分かりません社長!

…ハッ!もしやこの中にアリエルが閉じ込め…いやないか、それなら社長がさつきと割ってるだろう。大体後ろに同じのが入った木箱あるし。

「もう少し、もう少しだけ説明を」

「アリエルが今年のワインは出来が良かったから差し上げる、お前たちにも渡して欲しいと言ってきたのだ」

「へえ…」

ん?つて事は前にアトーフエに渡したのと同じでアスラ王室御用達のワインなのかこれ!?すごいのが来たな…

「だが俺は酒は飲まん。お前達に渡す分を抜いてアレクとフアリアスティアに渡したがそれでも余った。残りは全て持っていけ」

「あれ?オルステッド様つて下戸でしたっけ?」

「飲めないわけではないが…かつて酔った時に殺された事がある。それ以来飲んでいない」

酒で酔わせて龍退治、定番っちゃ定番だな、流石に神刀はドロップしないだろうが。加えてオルステッドは緊急時以外魔力を使わないから解毒魔術での酔い覚ましなんかやらないだろうし。

「分かりました。ならありがたく貰って帰ります。でも一本だけ残しておくので今度アレクと三人で一杯やりましょう、酔いは俺が覚ましてあげますから」

「ム、そうか。それなら頂くとしよう」

オルステッドの口角が血染めの月のように吊り上がった。飲まないようにしてるだけで酒自体は好きなんだろうな…

「というわけでお酒を貰ってきたんだ。飲む人」

「あ、飲む飲む！これ有名なやつだよね」

「アスラのワインですか、偶には良いですね」

「4人で飲むのは久しぶりね！」

シルフィ、ロキシィ、エリスが参加を表明した。リーリヤとアイシャは一本ずつ貰ってリーリヤはゼニスと、アイシャは一人で飲むそうだ。アイシャは参加したそうだったがリーリヤに言われて不参加を表明。遠慮させちやつたかな…今度サシで飲みにつれてくか。

子どもたちは当然不参加だ。飲みたい！と言ったらお説教が待っている事だろう。

「じゃあこの後寝室に集合って事で、先に行つて準備して待つてるね」
三人が頷いたのを見届けてから二階に上がり寝室に入る。部屋を温めたりワインを冷やす用の氷水を用意したりする為だ。

「ルデイ、グラスとかおつまみとか持つてきたよー」

「お、ありがとう」

しばらくすると三人が入ってきた。まず人数分のグラスをお盆に乗せてシルフィが、甘い系やピーナツ系のおつまみが入ったお皿を持ってロキシィが、お肉系のおつまみを持ってエリスが入ってきた。

「じゃあグラスに注いで…乾杯！」

「乾杯！」

乾杯の音頭と共にグラスを合わせる音が響く。音の心地よさに浮かれながらワインを口に含んだ。

「んっ…美味しいなこれ！」

「あ、前に飲んだのより甘いね、ロキシー好きそう。どう？」

「確かに甘くて美味しいですね…これはいけません、飲み過ぎてしまひそうです」

「もし皆が寝てもちやんと部屋まで運んであげるわ！」

「エリスがそう言ってくれるなら安心ですね。ルデイもう一杯ください」

「はい、どうぞ」

そう言いながらロキシーのグラスに酌をする。シルフィとエリスはそれぞれ好きになつまみをポリポリやりながらワインを飲んでい、勿論俺もそうだ。ちびちびやりながら三人から最近の家族の事とかの近況を聞き、俺は仕事先で起こった出来事を話す。満ち足りた時間だ。幸福とは此処にあり。

「あ、ルデイったらまたニチャつとしてる〜」

「え、嘘してた？」

「してたよ。でもボクルデイのその顔好きだけどね〜ウへへ…」

あらやだシルフィエツトさんつたらもう酔ってるわ。その証拠に腕にしがみついちゃってもう！

「ルデイの好きな顔ですか…私は特にキリツとした時の顔が好きですね」

「あー分かる分かる、なんかこう…ボクたちと顔つきが違う感じするよね」

「私はその…アレの時の顔が…」

「ちよつと待ってそれは流石に恥ずかしい」

とかいうかいつの間にか俺の好きな顔大会になってない!?!なにこれ羞恥プレイ!?

「えー良いじゃんか。じゃあじゃあルデイはボクたちのどんな時の顔が好きなの？」

「確かに気になりますね」

「……………」

完全に酔ってるシルフィと乗っかるロキシ、無言のままだけアツチ側のエリスの構図が完成した。別に敵対してるわけでもないが。

「じゃあそうだな…まずシルフィは子どもを抱っこしてあげてる時の顔かな？」

もう随分前だが、グレイラット家最初の子供であるルーシーを抱き上げて笑いかけてる所を見た時は聖母みたいだと思ったもんだ。

「ロキシは何かを教えてる時、俺に魔術を覚えてくれた時のことは今でも覚えてるよ」

普段神神とロキシを崇めてやまない俺であるがなんの神かと言えば知恵の神である。知恵を他者に教授する姿こそ神の真実が見える姿だと言えよう。

「エリスは剣を構えて不敵に笑ってる顔。なんだか凄く安心するんだ」

多分原風景はオルステッドと戦った時だ。自分の無力さと絶望を払拭してくれた笑顔と後ろ姿にあの時俺は惚れ直したんだ。

「……結構恥ずかしい事を言った気がする、俺も酔ってるな」

「そんな事ないですよ、答えてくれてありがとうございます」

そのロキシの言葉に続いて満足げに頷くふたり。ただ三人とも顔が赤いのは酒のせいだけではないだろう。

ま、皆が満足してくれたなら小っ恥ずかしい告白もした甲斐があるってもんさ。さあ、幸い酒もつまみも、時間だつてまだまだある。気恥ずかしさを流す為にもどんどんアルコールを投入して脳を洗浄してしまおうとしよう。

その後、酒量が増大した俺につられてか三人も同じように酒量が増えていった。話の内容が何故か猥談になったり、三人を抱きしめて愛を囁いたり色々したが楽しい晩酌だった。

ちなみに。酔いに酔った俺がよーし皆の肖像画でも作っちゃう

かー！なんて事を宣言したらしく、しかも別室で一人飲んでたアイシヤに聞かれていたらしく。朝食の席で「で、お兄ちゃん、シルフィ姉たちの肖像画っていつ作るの？」と爆弾を投下され、子どもたちも見たい見たい！と同調した結果恥ずかしがるシルフィとエリスの説得をしつつ、ザノバやアリエルに頼み込んで画家探しに奔走する事になったのだが、それは自業自得と言えよう。だって酔っ払ってない俺も欲しいしね！

おさかな！

「ママ！おさんぽ行きたい！」

「今日はもうダメよ！」

「なんで!?行きたい！」

「なんでもよ！」

そんな声が聞こえてきたのは自動人形の一件でシルフィたちのお叱りを受け終わり、痺れに痺れた膝を伸ばしている時だった。

ちなみに寝室にて行われた膝詰めお説教はそれはもう凄かった。結局誠心誠意を込めたJapaneseDO・GE・ZAの敢行と試作四号機を決してそのような用途には用いない、この先作成する自動人形たちには“その部位”は取り付けない、ナナホシの元に出向き謝罪するという3つの条件、そして三人＋ナナホシの言う事をなんでも一つ聞くという約束でどうかお怒りを鎮める事に成功したのだ。怖かった：

それはさておき。玄関先から聞こえてくる声の主はエリスとりりだ。

エリスが家族、それも子どもたちを怒鳴りつける事は今日の俺みために悪い事をしでかした場合を除いて無い。なので今聞こえてきてるのも単に声が大きいただけだ。

対するりりも活発な子だからか音量は結構ある方だ。なのでこれは言い合いと言うより単に声大きい人同士の通常運行と言ったところだろう。

「これこれお二人さんや、こんな時間にあんまり大声をだしたらご近所迷惑ですよ」

「ルーデウス」

「パパ」

今日は肩身が狭い身の上ではあるが、通りかかった者として一応注意しに向かうと玄関で腕を組見ながら通せんぼうしているエリスとその足元に抱きついてるりりが居た。その手には黒い糸のようなものが握られてるけど…なんだありや。

「で、どうしたの二人とも、言い合いなんて珍しいじゃないか」

「……別に、リリが今から散歩に行きたいって言うから止めただけよ」
「そうなの？」とリリに視線を向けてみると好奇心旺盛で目につく物
全てに目を輝かせているリリらしからぬ不満たつぷりの目で見つめ
返される。

「またさかなで見たい」

「逆撫でじゃなくてお魚よ」

「おさかな！おさかな見たい！」

ははあ話が見えてきたぞ、今日エリスたちは川に散歩に行つたと
言っていた。で、川で泳いでる魚を初めて見たリリが今からもう一回
川に行つて魚を見たいと駄々をこねているわけか。で、エリスが止め
てくれていると。

いくら散歩に連れて行くのがエリスで、もし行くとなつたら俺もつ
いて行くといつても流石に今からはなあ…明かりはスクロールなり
魔術なりでなんとでもなるけど夜の川つて普通に危ないしなあ…

「リリさんや、夜に外に出るのつて危ないし、もう暗いからお魚さんた
ちも寝てるかもしれないよ？」

「でも見たい…」

「なら明日また連れて行ってあげるわよ！」

「……うん」

そう言つてもイヤイヤ期真っ盛りのリリお嬢様はご不満の様子。
何か、何かもう一押し後一押しあれば…我が神ロキシよ、どうか啓
示を…！

…あ、啓示来た、ロキシで思いついた。

「なら明日、パパと一緒に釣りをしようか」

「つり？」

初めて聞く単語に目を輝かせるリリ。

我が家で釣りを布教したのはロキシだ、彼女は神であると同時に
宣教師でもあったのだ。

布教を受けてノルンが、ノルンを経由してルーシーが釣りを趣味に
した。今でもルーシーは友達やクライブ君を連れてちよくちよく釣

りに行ってるみたいだ。

とにかくリリはグレイラット家釣りサークルの神であらせられるロキシ一の娘。二歳児でも膝に抱えて竿を持たせてあげるくらいなら川の浅い部分を選べば大丈夫だろうし、楽しんでくれるだろう。

翌日。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「パパ」

「なんでしようか」

「つまんない」

「ですよー」。

釣果は見事なまでにオケラだった。川の中で遊ぶレオ、ララ、ジークを尻目に俺の膝の間に座って一緒に釣竿を支えているリリは明らかに飽きておられる。

ちなみに隣で同じように釣り糸を垂らしているエリスは子どもたちの動きに注意しながらももう2、3匹は釣っていた。エリスの方に座らせてあげれば良かったかな…

思えば前にアイシャと釣り勝負をした時もこんな感じだった気がする。もしかして俺って釣り向いてない…？

「ねえママ、おさかな見せて」

「良いわよ、こっちいらっしやい」

ああ…ついに娘までもが俺を見放した…土魔術で作ったバケツの中で泳ぐ魚を見てキャツキャツと喜んでるリリ可愛いなあ…エリス羨ましいなあ…

とジエラシーしていると、

「よしキタアアア!!!」

確かな手応えを感じる！やった！これで俺もリリに構ってもらえる！リリだけじゃない！今の声でこっちを向いたララとジークにもパパすごーいって言ってもらえるんだ！

「一匹目フィィィィィッシュ!!!」

釣竿の先にあつたのは、デカイブーツだった。

またかよ…

結局エリスが3匹、俺はオケラだった。でも良いんだ。俺が釣りしたかったわけじゃないし、リリがお魚みたいって言うからしただけだし。なんなら途中からララとジークに竿渡しちやったし。でも二人もしつかり釣れてるんだよあ…ぐすん。

「さあ焼くわよー！」

そんな俺はさておき。エリスは釣った魚の血抜きを済ませ、家から持ってきたらしい串に刺して焚き火の周りに並べていた。

「ママ！まだ？まだ？」

「まだよ」

「このお魚が僕のだよ！」

「ジーク、それは私が釣ったやつ」

「はいはい、二人共もう少しで焼けるから好きなのを選びなさい」

二人も産んでもらっておいで今更だけど、エリスもすっかり母親が板に付いてるな。はじめて会った頃からは想像もできない、ちよつと、いやかなり感慨深い。

「ルーデウスも早くこっちに来なさい！もう焼けるわよー！」

「パパ！パパがお皿作ってるの見たい！」

「分かったよ。エリス、リリとレオのは串から抜いて切ってあげてくれ」

「分かってるわ」

そう言いながら土魔術で作ったばかりの皿を人数分とまな板を手渡す。リリたちは俺の背中から魔術を眺めていた。そんなに面白いのかねこれ。

「出来たわよー！ララとジークは串に気をつけて食べなさい！」

「いただきますー！」

人数分のいただきます＋レオの遠吠えを聞いてから魚に手をつける。ララもジークも美味しそうに食べている。

はじめはリリのわがままから始まった事だったけど、自分で釣った魚を食べるというのは二人の食育にもなるだろうし、何より釣れたて

を食べるのは釣りの醍醐味だ。

…俺は釣れてないけど。

「美味しい?」

「美味しい!」

「そう、良かったわね」

「パパ!ママ!また来たい!今度はみんなで!」

「それも良いわね!ルーシーなんか魚籠いっぱい魚を釣り上げるのよ!」

「ホント!?すごい!」

「ねえパパ、僕の釣ったお魚美味しい?」

「美味しいよ、ありがとうジーク」

「やった!」

今度釣り大会開く時は勝てないにしろ一匹くらいは釣れると良いなあ…

ルーシーのお昼寝

「……………スー…スー…」

「あーパパだ…」

最近やつと慣れてきた学校。その授業が早めに終わり、お昼より早くお家に帰ってこれた。キッチンに居た白ママにただいまをして、最近もらった自分のお部屋で着替えてからリビングに入ると、パパがソファーでお昼寝をしていた。

お仕事でしばらく居なかつたけど、私が学校に行った後に帰って来たのかな？

飛びつきたくなっちゃったけど……………我慢する。パパはなんだかとてもお疲れみたいだから、起こしたらダメだと思う。

でもそれよりも気になる事があつた。寝ちやつてるパパのお髭だ。ぼーぼーに伸びている。

パパはいつもはお髭に触らせてくれない。私が触ろうとするとすぐにお風呂場に行つてしまふ、だから触れない。出張から帰つてきた時もまずお風呂に入る、やっぱり触れない。

でも今日のパパはお風呂に入る前に寝てしまつて、しかもみんな別のお部屋に居るか、お仕事かお買い物で出かけて今リビングには私とパパ以外誰もいない。

「……………んしょ」

パパの上に登つて、起こさないように気をつけながらお口の周りに手を伸ばす。

じより…じより…

「ふふっ…」

ママたちにも、お姉ちゃんたちにも、おばあちゃんたちにも、もちろん私にもないコレが好きだ。普段は触らせてくれない物をこっそり触つてる感じもいい、ララがイタズラ好きな気持ちもちよつとだけ分かる気がする。

パパの匂いも好きだ。いつもよりちよつとだけ汗くさい気もするけど、やっぱり安心するし、なんだかあつたかい。

「…ん…ふわあ…」

しばらくパパの匂いとお髭のじよりじよりをたんのうしてたら、なんだか眠たくなっちゃった。

今日のパパはすごく疲れてるみたいだし、多分私の方が先に起きれると思う。

うん。

だから私もパパの上でそのままお昼寝をする事にした。パパとお昼寝をするのなんかすごく久しぶりだ。パパより早く起きて、起こしてあげたらきつとパパも喜んで、褒めてくれるかなあ…

——シルフィエツト視点——

洗濯物を取り込み終わって、そろそろルデイを起こしてあげた方がいいかな？とリビングに足を踏み入れたボクは、珍しくも微笑ましいものを見てその足を止めた。

「うわあ…可愛い…」

ソファでクッションを枕に眠ってるルデイと、その上でルデイの顔に手を伸ばしながら同じく眠ってるルーシー。

ふたりの寝顔は本当にそっくりで、いつもちよつとだけ口を開けて寝てるから口の端から垂れるよだれの跡まで同じだ。

普段からちよつとおませさんな所があるルーシーを見て初めて会った頃のルデイを思い出す事もあるけど、こういう時にやっぱ親子なんだなあと改めて実感する。

「あ、でも何もかけずに寝てたら風邪をひいちゃうかも」

さつき取り込んだ洗濯物の中からタオルケットを持ってきてふたりにかけてあげる。風邪くらい魔術ですぐに治せるけど、予防しないで良いつてワケでもないしね。

それにしても、本当に無防備な寝顔…

ルデイはカッコいいけど童顔な方だし、ルーシーもまだ7歳だから当然なんだけれど、ふたりとも眠ってる顔はいつも以上に可愛くて、年齢よりもずっと幼く感じさせる。

「ん…ん…」

何の気なしに、ふたりの頬を軽くつついてみる。口をもごもごさせ

る仕草さえ同じで、そんな何でもない事が無性に嬉しくてたまらない。

「…………ふああ…」

ふたりの顔を見てたらなんだかボクまで眠くなってきちゃったな。

お昼ご飯の時間までまだ少しあるし、仕込みももう終わってて後は仕上げてしまっただけだ。他にやる事も特にない。

…………ちよつとくらいなら、良いよね？

ふたりが寝てるソファを背もたれに、少しだけお昼寝させてもらおう…

——ルーデウス視点——

「ん…………う…」

なんだか胸の辺りがポカポカしてるような気がして目が覚めた。

今回の出張はちよつと面倒な案件だったせいかな、家に帰ってくるなり風呂も入らずにソファに寝転んでしまったんだっただか。うっかりしてたな、汚れは事務所で最低限落としてから帰ってきたけど汗の匂いとかがソファに付いちやう。

それにしてもあったかいな、なんだか嬉しくなる重みと温もりだ。

そんな事を思いながら目を開くと、

「あれっ？ルーシー？」

俺の胸にひしつとしがみつきなながらスヤスヤと眠るルーシーの姿があった。

視界の端には風に揺れる真っ白な髪の毛がかかっていて、どうやらソファに寄りかかってシルフィも寝てるらしい。

俺とルーシーにタオルケットがかけられている所を見るに、シルフィがかけてくれてそのまま一緒に一眠りすることにしたのかな。

「ふふっ…」

穏やかな寝息をたてているルーシーを撫でてみると、くすぐったそうにちよつとだけ身じろぎしたり、可愛らしい耳がびよこん、と動いたりする。シルフィそっくりだな。

位置的に俺からは見えないけど、きつとシルフィも今のルーシーと同じ寝顔をしているに違いない。

「…ん…くああ…」

本当にあつたかい。あつたか過ぎてまた眠くなってきた。

本当はそろそろふたりと一緒に起きた方が良いんだろうけど、でももう暫く、もう暫くだけふたりとこうしていたい。

「まあ、大丈夫だろ」

今が何時くらいか分からないけど、朝帰ってきてからそう時間が経っているとも思えないし。

俺の上で寝てるルーシーが落っこちないように左手で抱きしめて、右手はシルフィを起こさないように気をつけながら彼女の手に添えて。

ああ、俺は最高に幸せだ。

赤い靴下

バキン!!

「む、またか」

これで6本目になる、折れてしまった針を足先の辺りまで編んだ靴下から形が崩れないように留意しながら引き抜き、次の針を代わりに入れる。

龍聖鬨気に守られた俺の体は針程度では傷つきもしないが、針の方はそうもいくまい。うっかり俺の体に当てようものなら最後、へし折れてしまう。俺は書き物ならともかく編み物など素人も同然だ。自分では注意しているつもりなのだが、すぐに針を駄目にしてしまう。

だがルーデウスが言うクリスマスとやらには赤い毛糸の靴下が恒例であるのだという、ナナホシも似たような事を言っていた。折角なら手ずから編むのが良いだろう。

そう思つて編み始めたのだが、思いの外骨だ。しかも段々と不恰好になつている様にさえ見える、どうせ贈るなら整つた物を贈りたいのだが…。

それにしても、ナナホシやルーデウスの世界に居たと言うサンタクロースとやらは片方だけの靴下を贈つて何をするというのか…皆目見当もつかん。

「む……」

いかなんな、考え事をしながら手を動かしていたせいかまた針が折れてしまった。

少し、休憩にするか…。

水を汲んできて杯に注ぎ、飲み干す。細かい作業で熱を持った頭に染み込むようで心地よい。

そんな事を思いながら編みかけの、少々歪な靴下に目を見遣る。やはり市販品を買った方がいいのかもしれない。呪い防止の兜のおかげで買い物程度なら問題なく人と関われるようになった。こんな不恰好な物を贈るよりも、キチンと編まれた靴下を送った方がきつと喜んでくれるのだろうか…。

そこで、初めて会った時の奴の娘、ルーシーの顔が思い浮かんだ。俺の事を父親だと勘違いした時の顔と、隣で苦虫を噛み潰したような顔をしていたルーデウスの顔もだ。

無論子供と関わるのが初めてと言うわけでは無い。無いが、ああまで無警戒に好かれたのは初めての経験だ。まるで普通の人間にでもなったかのような…。

「もう少し、続けるか」

判断は完成させてからでも遅くはない、まだクリスマスまで日はある。

俺はこれ以上針を壊さないよう慎重に編み物を続ける事にした。

クリスマス当日になった。

「……………」

書類の作成や遠出の合間に続けていた靴下がついに完成した。結果として20本以上の針を犠牲にしたが、達成感もある。

「しかし…これは…」

大き過ぎる。ルーシーの頭がすっぽりと収まりそうな大きさだ。歪な箇所を修正しようとあれこれ手を加えた結果ではあるのだが…。

「……………」

悩むところだ。もうじき夜だが、今から買いに行けば靴下くらいならば手に入れられよう。

しかし俺の理想とする靴下があるのかどうか…それに折角完成させたのだからこれを贈りたいと思う気持ちもあった。

「……………これにするか」

悩んだ結果、結局俺が編んだ靴下を持って行く事にした。ルーシーにはまた魔術のコツを教えに行った時に何か埋め合わせをする他ないだろう。

今日のために回収しておいた真紅のローブと魔術帽を身につけ兜を被り、予めペルギウスから入手しておいた龍族秘伝のプレゼントボックスに靴下を入れて白い袋に放り込む。

準備は整った。出撃だ。

ルーデウスの家の方からなにやらドタバタと音が聞こえる。目を凝らしてみると吹雪の中何やら珍妙な被り物をしたアイシヤが実に寒そうに煙突の前で座っているのが見えた。

何をやっているのかと訝しんでいると今度は何故か尻に火のついたルーデウスが煙突から飛び出してきた、と同時に滑ったのか雪と一緒に屋根から墜落していった。本当に何をやっているのだ……？

「むっ」

今の音で起きたのか、ルーシーが母であるシルフィエットを伴って玄関から飛び出してきた。

咄嗟に身を隠したが……これで良かったのか？

そう思っていると自分が夜更かししたせいでサンタが怒って帰ったのかとルーシーが泣き出してしまった。こちらからは見えないが、雪に埋もれているだろうルーデウスが動き出す気配はない。気絶したのだろうか……。

……ルーデウスが今日を楽しみにしていたのは知っているが、やむを得ん。門から入るとしよう。

「サンタ………さん？」

ルーシーがこちらに気づいた様だ。見れば雪の中からルーデウスが顔を覗かせている。出てきてやれば良いだろうに……。

「……………」

無言のまま箱を取り出し、ルーシーに手渡した。目を輝かせて受け取り、礼を返してくれる。

喜んでくれた様だ。中身を見ても喜んでくれるかは自信が無いが……。

満面の笑みの頭を撫でてから踵を返す。雪に埋もれたルーデウスは……まあ、自分でなんとかするだろう。

それにしても、ただプレゼントを渡すだけであれほど喜んでくれるとは。ルーデウスが楽しみにしていたのも頷ける。

来年も、またできるだろうか……。

翌日。

ルーデウスからルーシーが喜んでいたという報告及びお礼と共に、赤い靴下はプレゼントそのものではなくプレゼントを入れる物である、と聞かされたオルステッドがそれはもう恐ろしい表情の内心で驚いていたのはまた別のお話である。

顔合わせ

それは、ノルンとルイジエルドの結婚の準備を進めていた十日間の内のある日の事である。

「ルーデウス、お前の…ノルンの母親に会わせてくれないか？」

「へ？どうしたんですか急に」

ビヘイリル王国、スペルド族の村で二人の結婚式の準備やらなんやらで慌ただしくしている最中の事だったのでつい聞き返してしまっ
た。

「急でもないだろう」

「そうでしたね」

今自分が何をしているのかを思えば確かに急でもなんでもない。
娘を妻に貰おうというのにその親に挨拶もしないなんて不義理な人
ではないのだ、彼は。

「ノルンからお前達の母親の事を少しは聞いている、そちらの都合の
付く時で構わん」

「いえ、今日にしましょう、転移魔法陣を使えばすぐですからね」

そうと決まれば善は急げだ、俺はルイジエルドを引き連れて事務所
へ繋がっている転移魔法陣に飛び乗った。

家に戻った俺は玄関前で待つて貰ったルイジエルドとゼニスを通
れて街の郊外まで出かけた。

パウロの墓前へ。

「母さん、こちらルイジエルドさん。俺の恩人で…今度ノルンと結婚
する人です」

「ルイジエルド・スペルディアだ」

「……………」

俺の紹介でペコリと頭を下げるルイジエルドに対し、ゼニスは無言
だ。しかしその口元は微笑んでいる。

その後はしばらくルイジエルドはゼニスに対して言葉少なながら

自分がどの様な人間なのか、今どんな仕事をしているのかを話した。自分の過去も包み隠さずに。

「俺の命に替えても、お前達の…いや、貴女達の大切なノルンは幸せにする。必ず」

そうパウロの墓とゼニスへ向けて言い、ルイジェルドの話は終わった。人が聞けば拙い言葉だと思いかもしれないが、俺には誠意のこもった言葉だと思えた。

「……………」

ゼニスは少しすると、ルイジェルドのそばに近寄って…………彼の手を両手で握りしめた。

やはり言葉は無かったが…俺にはノルンをお願いね、という彼女の思いが伝わったとを感じる。きつと、ルイジェルドにも。

その後は俺とルイジェルドでパウロの墓を掃除した後二人を連れて家に帰った。

ゼニスをリーリヤに任せる時にもルイジェルドはリーリヤにも同じ様に挨拶をしてから帰路についた。

ルイジェルドに限って万一はないだろうが一応事務所まで送って行く。

「ノルンやエリスに会って行かなくて良かったんですか？」

「ああ、それにしても…」

「なんですか？」

「お前達の母親は、強いな」

「……………ええ」

ノルンから、ゼニスがミス教徒である事も聞いていたのかもしれない。もしかすると反対はされないまでも、あまり良くない反応をされる事も考えていたんだろうか。例えばゼニスが自由に意思表示をしにくい状態だったとしても。

「これからも、よろしく頼む」

「ええ、こちらこそ」

そう言い残して、ルイジェルドは転移魔法陣に乗って帰って行く

た。
こうして、ルイジェルドとゼニスの顔合わせは無事に終了したので
あった。

ララとリボン

その日のエリスは珍しく困っていた。
リボンがない。

今日は珍しく朝から蒸し暑かったので、髪を纏めようと思ったが、無い。

この家で主に髪飾りを使うのはロキシシーとアイシャの二人だ。他の人は髪紐か髪留めを使うか、そもそも髪を結ばない。

なのでエリスはその二人に訊ねてみたのだが：

「わたしの所には…紛れてないですね」

「あたしの所にも無いなあ」

「わかったわ」

無かったようだ。

まあ無いものはしょうがない。自分の髪色と同じ赤色で目立つし、きつとその内出てくるだろう。そうエリスは判断して子ども達の面倒を見ながら過ごす事にした。

「フフ…寝ちゃったわね」

アルスとジークはひたむきに鍛錬を重ねている。特にジークはアレクサンダーにも剣を習っているからか、あるいは生まれ持った怪力のおかげか近頃メキメキと力を付けている。

対するアルスも負けていない。エリスから見ればまだまだなのは当然だが、アルスの剣速はジークよりも上を行っていた。

そんな二人も鍛錬の疲れには勝てないのか、今は窓際でぐっすりと眠っている。見学していたリリとクリスもつられたのか一緒に夢の中だ。

自分も少し眠ろうか、と迷ったエリスだが、もうじき魔法大学に通っているルーシーとララも帰ってくる。眠るのは二人が帰ってきたからでいいだろう。

「ただいまー」

エリスがそう思っているうちに、ララが先に帰ってきたようだ。ラ

ラはまだ通い始めなのでルーシーよりも授業が少ない。

「ララ、おかえりなさい……あなたそれ」

エリスの視線が一点に集中し、ララの肩がハネる。

ララのトレードマークとも言える青髪のお下げ…の先端部分にある物をエリスが見つけたのだ。

すなわち、エリスのリボンである。

「勝手に使ったの?」

「違う、ちよつと借りただけ」

「それを勝手に使ったって言うのよ」

グウの音も出ない正論であった。ララは尻叩きを覚悟した。

「で、なんで使ったの?」

「赤ママの髪、キレイだったから」

「髪?」

そう訊ね返しながらエリスが自分の髪を持ち上げる、その顔は微笑みに彩られていた。子どもに褒められて喜ばない親は居ない。

「でもララの髪も素敵じゃない、ロキシーと同じで」

「別に自分の髪が嫌なわけじゃない」

「じゃあなんでよ」

「赤ママの色も欲しくなっただけ」

「ふーん…でも人の物を勝手に使っちゃダメよ、人から物を借りたい時は必ず許可を取ること。良いわね?」

「わかった」

「なら良いわ。靴履きなさい」

そう言いながら上着を羽織ったエリスはララを連れて玄関へ向かった。

「なんで?」

「リボン、買ってあげるわ!」

ララと手を繋いだエリスが向かったのは商業街の服飾店だ。

「これはグレイラット様、いつもお世話になっております。本日はどんなご入用で?」

お得意様の来店に店員が接客に来る。エリスと子供だけの来店に若干冷や汗が浮かんでいるように見えるのは気のせいだろう。多分。「この子のリボンを買いに来たのよ」

そう言いながらララを前に出すエリスとキョロキョロと辺りを見回すララ。

「どのような物をお探しで？」

「赤いのが良いわね！」

「うん、赤ママみたいなのがいい」

「なるほど、では髪飾りの売り場へご案内いたします」

店員に売り場へ案内された二人であるが、後は自分たちで探すわ！というエリスの一声で店員は撤収していった。

「で、どんなのが良いのよ」

「赤ママと同じやつ」

「アレはこの辺で買った物じゃないのよ」

「なら似たようなの」

「わかったわ」

そう言いながらエリスがリボンを物色し始める。ララもそれを目で追いながら自分好みのものを探しているようだ。

「これなんか似てるんじゃないの」

そう言いながらエリスが差し出したのは言う通りの真っ赤なりボンだ。淡めの石飾りがワンポイントになっている。

「なんか違う」

「何が違うのよ」

「分かんない、けどなんか違う」

「そう」

その後もエリスは色々とりボンを持ってきたがどれもララのお気に召さなかった。最終的に、なら自分で見て選びなさい、とエリスがララを抱き上げた。

「んー…これにする」

あれこれ見て回った後に、そう言ったララが手に取ったのは赤地に白いストライプ、茶色の石飾りがついたリボンだった。

「それにするの?」

「うん」

「私のと違うわよ?」

「うん、でも見てたらパパと白ママの色も欲しくなった」

「そう、ならそれにしなさい。きっと二人も喜ぶわ」

そう言ったエリスはララを下ろし、手を繋いで会計に向かった。――

「ただいま」

エリスとララの声が揃う。時刻はもう夕方だ。キッチンの方からは今晚の夕食の匂いが漂って来ている。

「おや、おかえりなさい。二人でどこか行ってたんですか?」

玄関まで出迎えに来てくれたロキシシーが二人に訊ねた。

「ちよっと服屋にね!」

「リボン買ってもらった」

そう言いながら持ち上げられたララのお下げの先端には、先程買ってもらったリボンが。

「おお良かったですねララ、とても似合ってますよ。あ、ルディとシルフィにも見せてあげたらどうでしょう?」

「そうね、なんでララがそのリボンにしたか教えてあげたら、きっと喜ぶわ」

「わかった、見せてくる。二人どこ?」

「ダイニングに居ますよ」

トテトテと走っていくララ。普段なら廊下は走らない!と注意が飛ぶところだが、今日くらいはおめこぼしだ。

「それで、どんな理由なんですか?」

「ええ、ララったら…」

今日の事を話しながら自分たちもダイニングへ向かうエリスとロキシシー。

その日の食卓の話題がララのリボンで持ちきりになったのは自然な成り行きであった。

もう一つの男子会

浮かれている。

いつもの様に書齋で書類を書いていても、山のように並んでいる書類から離れた部屋の隅、間違っても倒れて中身が溢れたりしないよう置かれた木箱に目線が吸い寄せられているのが分かる。

木箱の中にあるのは、以前アリエルから貰ったアスラ王国の酒だ。

以前、ルーデウスと一つ約束をした。内容自体はたわいもない事だ。

今度空いた日に一杯やろう、そんな普通の人間であれば当たり前のようになっている約束でしかない。

実際、ルーデウスは妻たちやザノバ、クリフと言った気心の知れた者たちと酒を酌み交わす事などしよっちゅうだろうし、アレクも父や祖母と顔を合わせれば酒くらい飲むだろう。特にアトーフエなどは相当の酒好きだ。

無論、俺とてそうした席が嫌いなわけではない。

だが俺と酒の席を囲む者は気が気ではなかったのではないかと思う。呪いのせいだな。

加えて酒を飲むと当然ながら酔い、判断力が落ちる。

そう弱い方ではない……と自分では思うのだが、それでも戦闘に支障は出る。酔った所を襲われでもしたのか目を覚ませばあの暗い森に戻されていた事もあった。

しかし酔い覚まし程度で魔力を使うのも勿体無い。だからどうしても必要な時以外は飲まなくなった。俺の為に解毒魔術をかけてくれる物も居なかったしな。

だが今回はルーデウスが居る、そのルーデウスが解毒魔術は自分がかかるので一緒に飲まないかと誘ってくれている。自然と口角が上がる。そんなたわいのない約束を楽しみにできる日が来るとは思いもしなかった。

「只今戻りました！オルステッド様、おられますか？」

「……ああ」

書齋に入ってきたのはアレクだ、奴には魔大陸での仕事を任せていた。その報告だろう。

「ご指示通り任務完了致しましたので、そのご報告にあがりました！」
満面の笑みでそう告げるアレク。ルーデウスが見れば尻尾が見えるとても言うのだろうな。

アレクは獣族ではないと言うのに。

「そうか、ご苦労だった。今日はもう休むがいい」

「ハッ！」

と、そこでアレクが何やら……そう、クリスマスの時に持ち出されるような袋を引き摺ってるのに気づいた。何か赤いシミのような物が浮かんでいる。

「……待て、アレクサンダー・ライバック」

「何でしょうか！ オルステッド様！」

「その袋はなんだ？」

「ああコレですか？ この前ルーデウス様から今度休みの日に事務所で飲み会やるから何かつまみになりそうな物を仕入れと言われてとまりましたので、ついでに狩って来た物です」

「……そうか、楽しみにしていよう」

「お任せください！ ではコレの処理がありますので失礼します！」

……俺も何か、仕入れておくとするか。ペルギウスに頼めば、何か良いものを教えてくれるだろう。

——ルーデウス視点——

いよいよこの日がやってきた。

何の日か？ 事務所での飲み会の日、言うなれば職場と同僚との飲み会だ。夫婦や友達と飲むのとはまた少し違う感覚だな。

ちなみに酒を飲み、つまみを食べる関係上どうしてもオルステッドのヘルメットは外さないといけないので、申し訳ないが受付の子は同席できない。

その為参加メンバーは社長：オルステッド、右腕：俺、左腕：アレ

クの三人だ。別に両腕だからといってハイ、アーンとかする予定はない。

「酒よし水よしつまみよしっと」

いくらなんでも一本では足りないだろうと追加の酒も何種類か用意してある。

アレクにも同じ様な事を頼んだが……ちよつと不安だ。あいつ一人所帯だけど料理とか出来るのかな……。

「それじゃあ行ってきまーす」

そう言つて家を出る。季節はそろそろ冬だ。事務所の辺りは雪が積もりやすいから今のうちに対策をしておかないとな。ドラゴンにこおりは大敵、こうかはばつぐんだ。

そんな事を思いながら歩いているうちに事務所に着いた。本日の飲み会場は会議室、テーブルも置いてあつて丁度いいし、書類もないから汚れを気にする必要も薄いからだ。

漏れてくる雰囲気からしてヘルメットを外したりラックス状態なのだろう、オルステッドが待つ部屋にノックをしてから入る。

「ルーデウス・グレイラット、参りました」

「……来たか」

部屋の中にいたのはオルステッド一人だ。どうやらアレクはまだらしい。それよりも気になるのは……

「あのオルステッド様、そちらの料理は一体……?」

机の上に並んだ料理の数々だ。量、種類共に豊富、もしや社長のお手製のこれ?どこまで万能なのこの人。

「む、これか。この間アレクがお前につまみを頼まれたと言つていな、俺も用意したのだ」

「なるほど」

つまみというかオードブル盛り合わせって感じだな。全体的にセンスがペルギウスっぽい感じがする。同じ龍族、味の好みも似通うのだろうか。

「アレクサンダー、参りました!」

「……来たか」

先程の俺と同じやり取りの後、台車にデカイ酒樽と木箱を乗せたアレクが会議室内に入ってきた。と同時に机の上の料理に目を奪われた様子、実年齢はともかく肉体的には食べ盛りって感じだもんな。美味しそうだし分かる分かる。

「オルステッド様、こちらは…」

「俺が用意した、好きに食べるがいい」

「ハッ！」

「では俺とアレクが持ってきた分も机に並べて…では始めましょうか」

「ああ」

「では、オルステッドコーポレーションの更なる躍進を目指して、乾杯！」

「……………？」

「……………」

オルステッドが俺を見ている、なんの儀式だそれとはという顔だ。アレクは…ダメだ料理しか見てねえ、二人とも乾杯くらい乗ってよ……………。

「それでえ！僕はフェアリアさんに言ったんですよ！この事はどうか内密にして！なのにルーデウス様と来たら…聞いてるんですかルーデウス様!?!」

「聞いている聞いている、あの時はホントごめん」

俺は先程からアレクに絡まれている。アトーフエもシャンドルも酒癖は悪い方じゃなかった気がするのにアレクはすんげえ絡み酒だ、まあそれだけ気を許してるって事だろう、うん。

「にしてもお前が持ってきたこのドラゴン肉、味は濃いめだけど酒に合うな、なんか食った事ある気がする」

「ああ！それはですね、ガスロー地方のブラックドレイクですよ！」

「ああ、前にネクロス要塞行った時に食べたな」

「昔、お祖母様の所にいた頃によく食べましてね」

お袋の……故郷の味って奴か。いいよな、そういうの。

「オルステッド様もいかがですー!?」

「……………ああ」

そうアレクが呼びかけた先、もう一人の参加者である所の我らがオルステッド社長は、先程から窓際でつまみと酒を交互に口に放り込んでいる。

心なしかいつも以上に無口だが、どれだけ飲んでいるかは足元に転がっている酒瓶の数で分かる。なんで顔色一つ変わらないんだろうねあの人。

「それにしてもオルステッド様が持ってきた料理も美味しいですね」

「ペルギウスに頼んだのだ」

「ああ、やっぱり」

そう言いながらまた酒を飲む社長の目は据わりきつねいる。

いつも以上に恐ろしい形相で、俺たちを睨んでいる……様に見えるだけなのはここに居る全員が知っている事だ。

「オルステッド様もこつちにきて話しますか?」

「……………いや、俺はここで良い」

「まあまあそう言わずに、アレク〜!さっきのドラゴン肉切り分けてくれ〜!」

「おいルーデウス」

「ドラゴンじゃなくてブラックドレイクですよ!さきさき、どうぞオルステッド様!」

社長を引つ張り俺たちが飲んでいた卓に着かせ、窓際からオードブルを持って来てアレクが切ったドラゴン肉と一緒に置きつつ、オルステッドの口へ持っていく。

社長の肩に掌が無い方の腕を回しながら一気飲みしてるアレクにしてもそうだが、普段ならここまでオルステッドに気安くは接しないだろう。なら俺も酔っているんだろうか。

まあいい、今夜は無礼講だ無礼講!酒は皆で飲んだ方が楽しいからな!

「まだまだ酒はありますし！夜明けまで飲み明かしますよ！」

—— オルステッド視点 ——

「うーん……シルフィ……ロキシー……エリス……やっぱり皆可愛いなあ……」

「ジーク君……髪を引っ張るのは……」

宴は終わった。

酔い潰れて寝てしまったルーデウスとアレクを事務所に備え付けである仮眠用の布団に寝かせ、毛布をかけてやる。

「ふっ」

楽しい宴だった。

それゆえいささか飲みすぎてしまった気もするが、まあ良い。ルーデウスが目を覚ましたら解毒をかけて貰えば良いだけの話だ。

それにしてもこんな宴に参加できる日が来るとは思いもしなかった。ルーデウスとアレクが騒ぎながら飲んでいるのを眺めているだけでも楽しめたが、ルーデウスに引っ張られ、アレクに切り分けてもらった肉を肴に飲むのも楽しかった。叶うのならばまたやりたいものだ。

賑やかなのは、嫌いではないからな。

「またいずれな」

そうやって俺は、仮眠室のドアを静かに閉めた。

パパはちゅーが好き

パパはちゅーが好きだと思う。

お仕事でお出かけする前に玄関とかでママ達とちゅーしてるのを見るし、おうちでもララ達によくしてる。

もちろん私にもしてくれる。でも最近は照れてしまって、ダメと言ってしまう。

この間も初めて学校に行く時にパパにいつてきますのちゅーは？と聞かれてついそれはダメ！つて言ってしまった。

そんな事もあったからか最近パパは私にあんまりちゅーをしてくれなくなった。

それが良い事なのか悪いことなのかはわからない。

わからないけど、少なきみしい。

「おやルーシー、どうかしましたか？」

「青ママ！」

ソファアの上でおひぎを抱えて考えてたら、青ママがやってきた。

そうだ、わからないなら青ママに聞けばいいんだった。

「ルーシーがそんなふう悩むなんて珍しいですね……もしかして学校で何かありましたか？」

「ううん、学校は楽しいよ」

「それは良かったです」

「でもパパとの事で悩んだの」

「ルデイとの？」

一体なんでしょうかと青ママが続きを待ってくれてる。言うのは少し恥ずかしいけど、言ってみないと。

「パパって、ちゅー好きでしょ？」

「………はい？ええまあ、好きだと思いますけど……？」

「でも初めて学校に行った時にパパに行つてきますのちゅーは？つて聞かれてダメつて言っちゃったの」

「ああ……シルフィがそんな事言つてましたね」

「それからパパは私にあんまりちゅーとか言わなくなつちやつて、も

しかしてパパ怒ってるのかな」

「そんな事無いと思いますけど……ルーシーはルデイにキス、ちゅーされたいんですか?」

「わかんない、わかんないけど私だけしてもらえないのはやだ」

「なるほど。恐らくルデイはルーシーがちゅーを嫌がってて、嫌がってる事をするのは良くないと思ってますね」

「そうなの?」

「ええ、ルーシーもお姉さんですから人が嫌がる事をしてはいけないというのは分かるでしょう?」

「うん」

「ですからルデイも同じ様にしているんですよ」

「でも私、ちゅーされるのは嫌じゃないよ?」

ママ達と同じくらいして欲しいとまでは思わなくても、たまにはして欲しい。

小さい頃は嫌がってたらしいけど今はそうじゃない。

「そうですね……今度またルデイの出張がありますから、こういうのはどうでしょうか」

——ルーデウス視点——

今日からまた出張だ。

まあ転移魔法陣のおかげで移動時間もほぼ無いし、今回は荒事も無さそうだし、早めに帰って来れそうだな。

「気をつけてね、怪我とかしちやダメだからね!」

「大丈夫、分かってるよ」

玄関まで見送りに来てくれたシルフィの心配に応えつつ、その体を抱きしめてキスを落とした。

流星に舌は入れないぜ。まだ朝だし。そういうのは仕事が終わってから! ってシルフィに怒られるし。

「それじゃあ行ってきます」

「あ、パパ!」

「お、ルーシー！お見送りに来てくれたのか？」

トテトテと効果音がつきそうな足取りでルーシーが玄関までやってきた。

「うん、あのね、パパ」

「んー？どうした？」

手招きされ、ルーシーと同じ目線まで顔を下げる。

「行ってらっしゃい！」

ちゅっ、と俺の頬とルーシーの唇が触れ合った音がした。シルフィが微笑ましいそうにこちらを見ている気配もする。

「い、行ってきまーす！」

ドアを開けて街へ出た。冷えた雪国の空気でも冷却できそうになりほど頬が熱い。にやけ面をおさえられる自信がない。

まったくウチの長女ったらおませさん！帰ってきたら昔みたいにいっぱいキスの雨を降らせちゃんうんだから……！！

髪型の由来は？

「兄さんの髪型ってお父さんとお揃いですよね」

普段は寮住まいのノルンが十日に一度家に帰ってくる日のこと。

夕食後にお茶を飲みながらノルンから学校での話を聞いていると、唐突にそう尋ねられた。

「ああ、言われてみるとそうだな、特に意識したつもりはなかったけど」

襟足を伸ばした一つ結び。確かにパウロもこんな感じだった。ブエナ村で暮らしていた頃もミリシオンで再会した時も同じ髪型だったし、多分ずっとああなんだろう。

「あ、お父さんの真似とかじゃなかったんですね」

「まあな、冒険者暮らしが長かったから髪の毛を整える習慣が無かったんだよ。父さんも似た様な理由なんじゃないか」

とはいえあのパウロの事だ、今はともかく冒険者時代はこの方がモテるとかそんな理由であの髪型にしたた可能性も否定できないな。

「でも前髪は整えてたんですよね？」

「前衛にしる後衛にしる前が見えないと命に関わるからな」

特に俺は予見眼の都合もあるし。

パウロ以外にギースやエリナリーゼも視界を邪魔しない様な髪型だ。

あ、そういえばゾルダートなんかは前髪を伸ばしてたな、それでも目にかからない様に撫でつけてはいたが。案外オシヤレさんなんだろうかあいつ。

まだしばらくはこの辺にいるって話らしいし今度会ったらからかってやろう。

「そうですか……勉強になります」

「ノルンは冒険者になりたいのか？」

「まだ考えてないですけど、旅をして暮らしたいなと思った事はあります」

「とりあえず成人……いや二十歳になるまでは家に居てね、あと父さ

ん達がこつちに来てから旅に出たいとか思ったらちやんと話し合って、認めてもらう事、書き置き一つ残してサヨウナラとかお兄ちゃん認めません、あとは……えつとえつと」

「わ、分かりました！分かりましたから！シルフィさんみたいな慌て方しないでください！」

そんな慌て方してたかな俺。一緒に暮らしてる内に似てきたのだろうか。

だとしたら嬉しいが……それはともかく、

『旅に出ます、探さないでください。ノルン』

とか書かれた手紙を見たら家族みんなで探し回るだろう。

うん。それは間違いない。

特にパウロなんか自分が実家を飛び出した事を棚に上げてあちこち駆けずり回る様が目に浮かぶ。

浮かぶだけにして欲しい。

「とりあえずノルンの進路はおいおい考えるところとして、何の話してたっけ」

「兄さんの髪型の話です」

「そうだったそうだった。急に聞いてきたけどもしかして似合ってたかい？」

「そんな事は無いですけど、ただそれだけ伸ばすのに時間はかかりそうですよね」

「二年あったからな。邪魔になってきたらまとめ切ったりはしてたけど、最近はシルフィがたまに毛先を整えてくれるし」

ちなみにアイシヤもやりたがるが流石に遠慮する。許せ妹よ、何より高さが足りませぬ。

やれば多分上手いんだろうけどな。

「二年？」

「アレ？計算間違えた？」

「いえ、でも魔大陸を旅してた時も冒険者してたんですよね？」

「ああ、その頃はルイジェルドさんがたまに切ってくれてたんだよ」「ルイジェルドさん！」

おおぅ……ノルンは本当にルイジェルドさんが好きだな。まさかとは思う事が無いでもないが、まさかね？

でも俺だって負けないんだからねノルン妹！

「ルイジェルドさんといえぱりカリスの町を出た時に丸刈りにしちゃった時は面食らったな」

「その前はどんな髪型だったんですか!？」

「人形と同じだよ、もちろん緑色のな」

思えばルイジェルドの前髪も目にかからない長さだった。

スペルド族のサードアイは某暗黒卿風の兜や視界ゼロなズダ袋を被ってても有効みたいだし、普通に視界確保だろう。

「定期的に剃ってたけど、魔大陸からミリス大陸に渡る時は剃れなかったからマリモみたいになつててちよつと面白かったな」

「まりも?」

「そういう植物が遠くにあるんだよ、ボールに芝生が生えたみたいなの。でも大森林で合流した時には元に戻ってたな」

多分捕まってた子供達を怖がらせない様にだろう。流石にノルンに奴隷周りの話はショツキングだからばやかしてるだろうけど、獣族の子供達を助けた話はルイジェルドから聞いたらしい。

その時の状況を詳しく聞かせて欲しいと以前ノルンにせがまれたが、生憎その頃の俺は無料アパート住まいだったので詳しくは知らないのであった。

「髪を伸ばしたルイジェルドさん、見てみたいです」

「そのうちまた会えるさ、その時に頼めば良いよ」

呪いも薄まってきているらしいし、本と人形をセット売りする計画が上手くいけば、将来的には髪を伸ばしたまま街中を歩ける様になるはずだ。

「それにしても髪型か……他人のはともかく自分のは気にした事無かったな。ノルンもずっとその髪型だよな?」

「はい、私もあんまり気にした事なくて、アイシャもずっと同じ髪型ですし。でも兄さんが狙ってその髪型にしてないのは意外でした」
「なんで?」

「だってお父さんと同じ一つ結びに、お母さんと同じ前髪の分け方じゃないですか」

「……ああ」

そういえばそうだった。こっちも全く意識してなかったが、ゼニスもこんな感じの前髪だった。こっちは転移事件の前からずっと同じだし遺伝だろう。そりゃ毛の質とかの違いはあるし多少は違うだろうが……。

「そっか、そうだな。同じだな」

「兄さん？」

「よし、今日はみんなで布団並べて寝ようか。二人で広い方の客間を掃除しよう」

「別に構いませんけど、どうしたんですか急に」

「なんとなく、たまにはいいだろ？」

「はあ……わかりました」

よく分からないと言った風ではあるがノルンが立ち上がる。俺もその後ろに続いて二人で一緒に二階の客間を掃除した。

その後、アイシャにお兄ちゃん達の掃除は雑とお小言を頂戴したり、でも家族みんな一緒に寝るのを楽しそうにしてる様子に和んだり。シルフィにボクも一緒にいいのかな？と頬を掻きながら遠慮されそうになったのを説得したりしつつも、四人で布団を横並びに眠ることに成功した。

思えばブエナ村に居た頃だってこんな風に寝た事はなかった気がする。

パウロ達が無事にこっちにきたら、一回くらいみんなで川の字になって寝る事にしよう、ノルンもアイシャも喜ぶ姿が目に見えかぶ。こっちは、本当になればいいな。

夜に歩く

なんとなく目が覚めた。

寝苦しかったのかもしれないし、夢見が悪かったのかもしれない。ひよつとしたら人肌恋しくなったのかも。いずれにせよしばらくは寝つけそうになかった。

こういう時は散歩だな。

と言ってもこんな時間に外を出歩くのは危ないから、家の中だが。足音を立てないように注意しながら廊下を歩く。

普段は6人の子どもたちが立てる喧騒で溢れている我が家もこの時間は静寂そのもの。

むしろこんな時間に騒ぐような子はエリスの尻叩きとシルフィのお説教が待っている事だろう。前にララがやられてたな。

そんな事を考えているうちに目的の部屋の前に着いた。音を立てないように注意しながらドアを開く。

「すー……すー……うへへ……」

シルフィの部屋である。

笑っているところを見ると、何やら良い夢を見ているようだ。

眠っているシルフィを観察する。彼女は体を丸めて眠る事が多い。今日もそうだ。

俺と寝る時は同じような体勢のまま体をすり寄せてきたりする。腕の中にすっぽり収まる感じだな。小動物めいて大変可愛い。

「んん……るでい……」

名前を呼ばれた。もしや起こしてしまっ……てはないらしい。よかった。

「なでなでして……」

要望に答えて頭を撫でる。

「ん……えへへ……」

我慢できなくなる前に部屋を退出。あんまり長居すると辛抱できなくなりそうだ。

起こしてもシルフィは許してくれるだろうけどな。

次の目的地に着いた。やっぱり音を立てないように部屋に侵入する。

「……すやあ……」

ロキシーの部屋である。今日の神は布団を抱き枕のようにして眠っている。おい布団そこ代われ……と言いたいが、無理矢理剥ぎ取ったりしたら間違いなく起こしてしまうし、よく考えなくても俺と寝る時は抱きついてきてくれるのだ。自重自重。

ロキシーのキュートなほっぺたをつんつんするくらいで我慢だ。

「……おや、ルデイですか……」

もそもぞとロキシーが身じろぎをする。

しまった、今度こそ起こしてしまったか……！

「キスしてくれたらいいですよ……」

何をだろう。だが答えない道理はない。ほっぺたにキスを落としてみる。

「……すやあ……」

寝てしまった。ロキシーは何を許してくれるつもりだったのだろうか、すごく気になります先生！

まあいつか。そのまま部屋を退出。次の目的地へ向かおう。

もうお分かりだろう。エリスの部屋である。

エリスは大の字になって眠っている。いつもならその腕を枕にさせてもらっているのだが……今日のエリスはなんでかちよつと寝苦しそうだな、暑いのだろうか。ちよつと部屋を冷やしておこう。

それにしても、こうして寝顔を見ているとボレアスの屋敷にいた頃を思い出す。授業を抜け出したお嬢様にイタズラしようとしたらボレアスパンチをもらったのも今となっては懐かしい思い出だ。

そんな事を考えながらエリスの寝顔を眺めていると、

「何してるのよ」

「え」

エリスの目が突然見開かれ、俺とぼつちり視線があった。

「や、やあこんばんわハニー、でももう良い子は寝る時間だよというわけでおやすみあああああああ！」

脱兎の如く逃げ出そうとしたら腕を掴まれてベッドに引きずり込まれてしまった！

「なんだか寒気がしたと思ったらルーデウスだったのね」

ああそっか、冷気は俺を中心に回るんだから俺が近くにいたらそりや寒いよな。

「うん、ごめん、なんとなく寝付けなくてさ、みんなの寝顔見たら眠くなるかなーとか思ってたね」

「そう、丁度いいわね」

「えつと……何が？」

「私も寝付けそうにないし、運動したらきつとよく眠れるわ！」

その言葉を最後にエリスは俺を蹂躪した。

確かによく眠れたなど朝方エリスの腕枕の中で目覚めながら俺はそう思ったのだった。

日記

『ルーデウスの日記』と呼ばれるものは二種類存在する。一つは過去転移魔術で異なる世界からやってきたルーデウスが持っていたものと、もうひとつ。

「やっぱりすごい量だね」

「どこから手をつけましようか」

ルーデウスの書齋に二人の人影がある。

一人は白髪の女性、シルフィエツト。もう一人は青髪の女性、ロキシーである。二人はこの部屋を掃除するためにやってきた。

とはいえ。しばらく使われていなかった部屋だが手入れは行き届いている。

これなら埃や虫に気を遣う必要はないだろうと二人は判断し、手始めに荷物の整理に入った。

「あ……」

入ろうとした。だがそれはシルフィエツトがある一冊の本を見つけた事で棚上げとなった。

「どうしたんですか？」

「見てロキシー、ルデイの日記だ」

「例の日記でしょうか」

「ううん、ルデイがたまに書いてる方だよ」

書いてるの見たことあるし、とシルフィエツトは書齋の椅子に座った。

「読んじやうんですか？」

「せっかくだしね、ロキシーも一緒に読もうよ」

「……いいでしょう。ルデイがどんな事を書いているのか、わたしも師匠としてチェックしておかないといけませんし」

「ふふっ……共犯だねボクたち」

そう言ってシルフィエツトが日記を読み始める。ロキシーも近くに椅子を持ってきて座った。

しばらく、紙をめくる音だけが書齋に響く。

「なんだか日記というよりお手紙みたいだね」

「パウロさんに宛てたものみたいですよ……あつ、ララが産まれた時の事まで書いてます」

「そりゃ書くよ、ルデイはみんなの事大好きだもん。そういえばルーシーは小さい頃ルデイのこと怖がってたっけ」

二人は懐かしい気持ちになりながらページを進める。

「思えばあの頃のルデイはいつも忙しそうにしましたね」

「ビヘイリルでの戦いの後は少し落ち着いたけどね」

進める。

「ここのはどういう意味でしょう」

「あ、前にナナホシから聞いたことあるよ、確かルデイの前いた世界の言葉で……」

進める。

「この頃になるとだいぶ文章も落ち着いてますね、クリスが婚約して、ララが旅に出た頃でしょうか。あの子は元気にやっってるでしょうか……」

「大丈夫だよ、ボクたちみんなの子どもだよ？」

進め終わる。パタン、と日記が閉じられた。

書斎に入る前は昼過ぎだったのに、窓からは夕陽が見えている。

「結構熱中しちゃいましたね」

「……うん」

「早く片付けてしまわないと……シルフィ？」

「うん……うん……大丈夫。大丈夫、だよ……」

シルフィの目から涙がこぼれていた。

静かに、そして日記が汚れないようにではあるが、確かにこぼれていた。

「ごめん、ごめんねロキシ、辛いのはロキシだって一緒なのに……ボクだけ、ボクだけこんな……」

「ええ、辛いのは一緒です。だから大丈夫です、ちゃんとわかっていますよシルフィ。忘れちゃったんですか？わたし、シルフィよりもお姉さんなんですから」

そう言いながら、ロキシーがシルフィの背中をなでる。

その労りに安堵と罪悪感をシルフィが覚えていると、

「なにしてるの?」

もう一人が心配そうな顔で書斎に現れた。

赤髪、しかしエリスではなく。その髪を三つ編みに、腕に龍神の腕輪をはめた少女。

「ひいおばあちゃんたち、どうしたの?」

エリスの曾孫、フェリスがそこにいた。

ふたりが部屋に入ったきり出てこず、そのうえ部屋から曾祖母のすすり泣く声が聞こえてきて、心配してやってきたのだろう。

「フェリス……大丈夫だよ、ちよつとひいおじいちゃんのこと、思い出してただけ」

「そうなの?」

「そうですよ、もうすぐに出ますから、ママたちに伝えてきてください」

「わかった!」

トタトタとフェリスが台所に向かう。

「ふふっ……」

「元氣出たみたいですね」

「うん。本当にあの子はエリスにそっくりだね」

「ええ、本当に。もうすぐ晩ご飯ですし、それまで続きをしましょうか」

「そうだね、ルデイが遺してくれたもの、ちゃんと整理してあげないと」

これは甲龍歴481年のある日。

もう書かれる事の無い日記の、さらに先の二ページ。

ある暑い日

ここ最近暑いですね……わたしが学生として魔法大学に通っていた頃に比べてですが、少し夏の暑さが増した気がします。

まあ、ラノアは北国なので夏はすぐに過ぎ去ってしまうのですが。それでも暑いものは暑いです。ルデイみたいに部屋を冷やせればいいんですが、そんな魔力もありません。

なので、家に持ち帰った仕事などはルデイの近くでしたいのですが、まあそれをルデイのそばに行く理由にしているかと言われるら否定はできませんけど……。

そんなわけでルデイを探しているのですが……いませんね。しばらくお休みと聞いていたので家にいるかと思ったのですが、散歩でしょうか。台所にはシルフィたちがいるので買い物ではないでしょう。

『氷槍』！』

む、ルデイの声です。これは庭の方ですね。魔術を使ったようすが虫でもいたのででしょうか。

「おやロキシー。おはようございます」

「おはようございます。あの……何をしていますか？」

先ほどの魔術で生やしたらしい氷の前で、これまた魔術で拵えたらしい柄のついたヤスリのようなものと、やや深めのお皿を構えたルデイがそこにはいました。

「本当に何をしていますか……？」

「最近暑いですからね、かき氷でも作ったら涼しくてみんな喜ぶだろうと思ひまして」

「かき氷おひり」

一体なんなのでしょうか。氷というくらいですからきつと冷たいものでしょう。

かき……かき……花卉……？氷の花でも作るのでしょうか。視覚的に涼しそうですね。

ララかアルスが壊しちやいそうですね。

「それでかき氷とはなんなのでしょようか」

「氷を細かく砕いた食べ物です。甘いシロップをかけて食べるので、今シルフィとアイシャに作ってもらっています」

「ほう、甘いものですか……!」

「ええ、ロキシシーは好きですよね?」

もちろん、と頷きそうになりましたが自制です。子どもたちに見られたら笑われちゃいますし。

「シルフィたちがシロップを作っている間に氷を作って削ろうとしていたんです」

こんなふうには、とルデイが右手にもったヤスリを氷に押し付けました。わざわざザリフの籠手を持ち出してきたようで、みるみるうちに氷が削れていきます。

そしてお皿の上にもるで雪のように削られた氷が積もっていく……幻想的です。確かにこれは涼しそうです。

「ルデイーシロップできましたよー。あ、ロキシシー、おはよう」

「おはようございます。すみません、手伝いもせずに」

「いいんだよ、ああ、ならロキシシーが味見してくれる?」

「いいんですか!」

「うん、甘いものならロキシシーが一番だからね」

「じゃあどうぞロキシシー、削り立てをお召し上がりください」

差し出されたお皿の上に築かれた雪の山に向かってシルフィがシロップをかけて、わたしに回してくれました。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

かき氷を口に含む。

まずやってきたのは頭の芯を貫くような冷たさ。次にフワシヤリとした食感と、イチゴと砂糖を使ったシロップの甘み。これは……!「美味しいです!」

「それは良かった、追加削りますね」

「あ、別のシロップもあるよ、味見してくれる?」

「もちろんです」

先ほどの自制も忘れてつい即答してしまう。でも仕方がない。だって美味しいんですから。

「こっちはレモンですか、さっぱりしていて良いですね……!」

「ロキシ―って本当に美味しそうに食べてくれるよね、作りがいがあるよ」

「はい、シルフィの分もできましたぞ。どっちかける?」

「あ、ありがとう。イチゴの方お願い」

「はいはい」

「おや、ルディは食べないのですか?」

シルフィの分を削り終わったルディは手を止めてしまいました。てつきり一緒に食べるものと思っていたのですが……。

「いえ、俺も食べるんですけど……」

「?」

「先にみんなの分を削ってしまおうかと」

そう言いながらルディは後ろを指差しました。立ち上がった彼の肩越しに指差す先を見ると……

「涼しそうね!」

「なにそれ?」

散歩帰りらしいエリスとララが、二人手を繋いで不思議な物を見る様な目でわたしたち……の手元を見ていました。

「あれ?アルスとジークは?」

「アイシャがお風呂に入れてくれてるわ」

「ああ、それで待ってる間に庭に来たんですね」

「そう言う事ね!」

で何してるのよ、とルディにエリスが尋ねて、いつの間に削ったのかルディが二人にかき氷を差し出しています。

「冷たくて美味しいわね!」

「あまい、おいしい」

二人ともすごい勢いで食べていきますね……後でお腹痛くなったりしないでしょうか。

そんな事を思っていると、

「ウツ」

「大丈夫ですか!？」

呻き声を上げてララがスプーンを取り落としました!

あわわわ喉、喉に詰まった……!?!と、とにかくすぐに吐かせないと……!

「ああ、大丈夫ですよロキシ、これは何でもありませんから」

「パパ、ママ、頭キーンってする」

「冷たいものを一気に食べるとそうなたちやうんだ、不思議だよな」

「ほ、本当に……?」

「はい、なんでかは知りませんが」

見れば近くでエリスも頭を抑えていました。

シルフィも困った様に笑っているので本当に深刻なものではないのでしよう。

「あ、安心しました……」

「でもあんまり勢いよく食べちゃダメだそララ、かき氷はすぐに溶けるけど、ほかの固いものとかだと喉に詰まっちゃやう事もあるからな」

「ん、わかった、気をつける。……おかわり」

「はいはい……ロキシもおかわり食べますか?」

「はい、いただきます。次はイチゴシロップでお願いします」

ホツとしたら甘いものが欲しくなっちゃいました。

ルディからおかわりをもらって、エリスとララがお風呂に行くまでの間、二人から散歩中であつた事を聞きつつかき氷を堪能し。そして二人と入れ替わりで庭に出てきたアルスとジークとも同じ事をする。

体は冷えているのに心は温かい、そんな時間でした。こんな事もあるなら、暑い日も悪くないものですね。

暗闇の中で

「…………ふう…………」

岩砲弾をくらった魔物が爆散するのを見届け、予見眼で動き出す気配が無い事を確認して一息つく。少し離れた位置にいるエリスの無事も千里眼で確認済み。ミツシヨンコンプリート。

いつもの如くオルステッドのおつかいで魔物退治にやってきたが、今回はちよつと数が多かったな。いやいや社長との付き合いももうすぐ10年、俺もまだ20代。この程度でへばったりはしないとも。とはいえ多少は疲れたな。エリスが戻って来たら抱きついて……いや家に帰ってからののお楽しみにとっておくべきか。しかしなあ…………。

「何ブツブツ言ってるのよ」

「おうわ!」

そんな事を悩んでいるといつの間にかエリスが背後に居た。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない」

「いやゴメン、気を抜いてたもんだから…………アレ?」

「どうしたのよ」

まだ何か居るの!?!と腰の剣に手を当てたエリスの姿がボヤけているような。元々目で追いきれないくらい動きは素早いけど、今のは残像のようにさえ、見えたような。

「んんん?」

目にゴミでも入ったか、とこすってみても特に変化なし。これは…………

「魔眼の不調だろう」

心配そうなエリスに手を引いてもらってなんとか事務所まで帰り、オルステッドの診察を受けた。

道中でどんどん景色が暗くなって、歩けなくなってしまいそうだったが…………エリスが居てくれて本当に良かった。

「一時的な物だ、しばらくすれば治る」

「本当でしようね！」

「似た様な症状は診たことがある、間違いない」

あんまり見えなくてもわかる。今オルステッドはいつも通りの怖い顔に見えて、すごく心配そうな、申し訳なきような顔をしているに違いない。

なので剣の柄頭をコンコンやるのはやめて欲しいエリス。音に敏感になってるせいかちよつと怖い。

「二種の魔眼を持つお前は、一つしか持たない者に比べて眼球と脳に負荷がかかりやすい。特にここしばらくは無理をさせた、すまなかつたな」

「ああいえ。しかしこれでは仕事になりませんね、治るまで休暇をいただきますが、宜しいでしょうか」

「ああ」

いわゆる傷病休暇というやつだな。ここ最近は働き詰めだったし丁度いい、しばらく骨休めさせてもらうとしよう。

「では、失礼します」

「フーン！」

不機嫌そうに鼻を鳴らしたエリスに手を引いてもらいながら事務所を退出、先導に従って肌寒くなってきた街を歩く。

「シルフィたちにはもう伝えてあるわ、心配してたんだから」

「そっか……ありがとな」

「私だって、すごく心配したんだから」

「ああ、ごめんな」

そんな会話をしているうちに家に着いたらしい。二人でただいまと言うと家の中からドタドタと走り寄る声が聞こえてきた。

「ルデイー！大丈夫!？」

「ととと図書館から似た様な文献を持ってきましたので……!!」

「あの、二人とも落ち着いて、こける、こけるから」

「オルステッドはちゃんと治るって言ってたから大丈夫よ」

エリスがそう言うとき空気が弛緩した。

「まあ見えなだけで他に変なところも無いし……しばらくは不便を

かけちやうと思うけど」

「うん、大丈夫だよ、その間はボクらが手伝うから。エリス、まずはお風呂に入れてあげて」

「わかったわー!」

　　またもやエリスに手を引かれてお風呂場へ連れていかれ、慣れた手つきで服を脱がされる。今更照れる事もないが……見えないままなすがままるのがちよつとアレだな、背徳感。

　　エリスの息が肌に当たってビクってなったのバレてないかしら。

「ちよつと待つてなさい」

　　ハイ、と脱衣所の壁に手を持っていかれた。少しして聞こえてくる衣擦れの音。

「じゃあ洗っていくわね」

「お願いします」

　　浴室の椅子に座らせてもらい、エリスが石鹸を取り出してタオルで泡立てているのを耳で感じ、そのタオルごしに他人の体を洗い慣れた手つきを肌で感じる。

「今更だけど、ルーデウスの背中って大きいわね」

「俺だって鍛えてるからね」

　　エリスほどではないだろうが。それでもおんぶくらいならいつでもしてあげられるさ。

　　あ、今は無理だった。コケたら危ない。

「背中側終わったわよ。前も、私が洗っていい?」

「もちろん」

　　そう答えるとグルンと半回転させられる。見えてたら目を回してたな。

　　こちらも手早く洗われ、あらかじめ貯めておいてもらったらしい湯船に入れられた。

「ふう……」

　　体中に溜まった疲れがお湯に溶け出していくような感覚、やっと帰ってきたという心地になる。うとうと……

「寝ちやダメよ」

「分かってるよ」

そう言いながらエリスも自分の体を洗い終わり、俺の背中側に滑り込む形で湯船に入ってきた。やあらかい、このままだと本当に寝てしまいそう。

「ねえルーデウス」

「なあに」

「大丈夫なの？」

大丈夫か、と聞かれると曖昧な返事しか返せそうにない。一応治療魔術はかけたし、これ以上出来ることもない。最悪目を抉って王級治療のスクロールという手もあるが……絶対痛いしやりたかない。

そもそも魔眼がどうなるか分からないし。

「不安は不安だけどき、みんなが居てくれるから大丈夫だよ」

「そう？」

「うん、今だってお風呂に入れてくれたしね」

「ちゃんと出来た？」

震えを隠しきれていないエリスの声。こんな声のエリスは久しぶりだ。自分がついていたのに不甲斐ない、とかそんな風に思っているのかもしれない。

「出来てたよ、ありがとうエリス」

少しでもその不安を和らげてあげたくて、エリスの手を撫でたり、頭を擦り付けてみたりした。

うん、実に良い雰囲気だな。このまま押せば……！

「ダメよ」

「な、何が？」

「ダメよ、見えてないかもしれないけど、すぐくえっちな顔してるもの。治るまではダメよ、危ないわ」

「はい」

これは是が非でも早く治さないとな。

お風呂上がり。コーヒー牛乳が欲しくなる響きだがそんな物は無い、フルーツ牛乳ならある。そしてこれはもちろん現実逃避である。

「はい、あーん」

「ほらルデイ、お口開けてください、あーん」

「待って、待って二人とも。子供たちの前でそれはちよつと恥ずかしい」

お風呂から上がるともう晩ごはんはできていた。疲れは取れたがお腹はぺこぺこだ。なのでいただく事にしたのだが……。

「何を照れてるんですかルデイ、早く食べないと冷めちやいますよ」「そうだよ、あつたかいうちに食べてね？」

シルフィとロキシ、両サイドからあーんの洗礼を受けていた。まあこれだけならご褒美だ。これだけなら。

しかし今は家族団欒の夕食中、すなわち子供たちの目の前である。生暖かい空気がちよつと辛い。

「ほら、早く食べちやいなさい、よく噛むのよ！」

「赤ママ、一行で矛盾してる」

「してないわ、いいから食べなさい」

先ほどからエリスが頑張って俺たちから視線を逸らそうとしてくれてはいるがうまく行っていないようだ。

「もう！ルデイったら恥ずかしがり屋さんなんだから。ボクたちにもお世話させてよ」

「シルフィ、楽しんでない？」

「んふふ、どうでしょう」

これは楽しんでるな。良いんだけどさ、暗いだけだと気分も沈むし、一時的な物なんだし。

「でも食べさせてあげたいのは本当だし、少しでもお世話してあげたいのも本当だよ、はいあーん」

「あーん」

もう開き直ってしまえ。あむあむ、美味しい。ロキシの匙の分もいただきます。

きつと二人とも嬉しそうな顔をしているんだろうな、見れないのが

残念だ。

「ルデイ、着きましたよ」

「ありがとうございます、ロキシシー」

食後しばらくしてからロキシシーに寝室に誘導してもらった。

もちろんエロい事をするのではなく普通に寝るためである。

「二人は後から来ますから、それまでベッドにかけて待っていていましょうか」

「そうですね」

今日はみんなで添い寝してくれる事になった。暗闇の中一人きりは寂しかったし、ありがたい。

「こうしてルデイの手を引いてあげると昔を思い出しますね」

「昔ですか」

「ええ、ブエナ村での卒業試験です」

懐かしいな。ロキシシーが居なければ外に出られないまま、シルフィやエリスとも出会えなかったかもしれない。想像するだけで寒気がする人生だ。

「思えばもう20年以上も前ですか、初対面でちっちゃいと言われたのも懐かしいですね」

「いやそれは本当にごめんなさい」

「ふふ、怒ってないですよ……ああ、来たみたいですね」

確かに。扉の向こうから二人分の足音が聞こえて来る。

「ルデイ、ロキシシー、遅くなってゴメンね」

「私もいるわよ!」

「ああ、二人ともありがとうな」

自分でも唐突に思えたがお礼を言う。なんとなくそう言う気分だった。

「ふふっ……変なルデイ、困った時はお互い様でしょ?」

さあ、今日はもう寝ちやおうね、とシルフィの一声でみんなまとめ

てベッドの中へ倒れ込む。

「こういう所、勝てないな。」

「でもなんで急にお礼なんか言ったの？」

「変かな？」

「変じゃないよ、ちよつと気になっただけ」

俺の右側に寝転んで、安心させるように胸をぽんぽんと叩きながら問うてきた。

「うーん、なんとなく？」

シルフィの首あたりに腕を差し込み、左側に陣取ったエリスに腕枕をされつつその間にしがみついていたロキシーを感じながらそう答えた。

「こういう時にさ、誰かがそばに居てくれるだけでもすごく安心するなって」

「そっか、良かった。早く良くなるといいね」

三人の体温が暖かくて柔らかくて、すぐに眠くなってきた。もつともつと話していたいけど、シルフィの言う通り、もう寝てしまおうか。

「ああ……おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

みんなが居てくれて、これ以上なく嬉しくて、そして幸せだ。

翌朝、ぼやけながらも見えはじめた視界に彼女たちの寝顔を収めながら、そう思った。

毛刈り一族の陰謀

「くうくうん……」

「ん？どうしたレオ？」

ここ数日、レオは室内……というか、なんでか俺の近くでぐでーつとしてゐる事が多い。病気かも知れないと思つてオルステッドに見てもらつたが、特に病気ではないらしい。

それで一安心して帰つてきたのだが……帰つてくるなりまたぐでーだ。

「レオ、大丈夫かな……」

「大丈夫」

「うわっ！」

俺に背中を向けているレオのお腹側からララが出てきた。一瞬ついにレオが人間語を習得したのかと思つた……。

いや念話っぽいのでララやゼニスと話せるらしいのは知つてるんだけどな。

「で、その心は？」

「レオは暑がつてるだけ、パパの近くは冷たい風が出てて快適って言つてる」

「暑い……ああ、成る程」

レオの毛は実にもこもこしている。冬場なんか子ども達に大人気だ。正直嫉妬している。

だが今は夏だ。聖獣の生態に換毛期があるのかどうかは知らないが、少なくともうちのオワンコ様の毛は一年中変わる気配が無い。

ここ最近ずっと晴れててお洗濯日和だったしな、さぞ暑かろうて。

「じゃあ、思い切つて毛刈りするか」

「毛刈り？レオを？」

「そう。あ、レオは嫌がつてないか？」

そこだけは確認しておこう。普段から毛先を整えるのとかでハサミには慣れてるだろうけど、毛刈りとなるとまた違つてくるかもしれないからな。

「んー……嫌がってないっぽい」

「そっか、なら今度の休みにするか。もう少しだけ我慢してくれ、レオ」

「ワフツー！」

良いお返事だ。ご褒美にさらに一段階冷たい風を送り込んでやつたら、身震いした後尻尾で軽くはたかれ、ララ経由で今度は寒いと言われた。

ごめんなさい。

数日後。

「ではレオのトリミング大会を始めます。拍手ー！」

ぱちぱちぱち……とまばらな拍手が響く。新品の動物用ハサミとその他諸々必要なものを買ってきた後、レオを庭に連れ出した。

「まず切るのは俺とシルフィ、レオの保定はロキシー、エリスがお願い。ルーシーとララは切った毛が飛ばないように集めておいてくれ」

「はーい」

「分かりました」

「わかったわ！」

アルス以下の子ども達は危ないのでリーリヤとアイシャに見てもらっている。刃物を使うからな。

シルフィが居るからすぐに治してもらえろとはいえ怪我なんかしてほしく無いし。

「じゃあルーシーとララは切ってる途中に近くに寄らないようにな、近寄る時は一声かけてくれ」

「はーい！」

「わかった」

「じゃあ始めるぞ。レオ、動くと危ないからあんまり動かないようにな」

「ワン！」

エリスがレオの前面に、ロキシシーが後方に陣取って、俺が首側から、シルフィが尻尾側からハサミを入れ始めた。

ちよき……ちよきちよき……

この世界にはバリカンなんて物は無い。

なのでハサミを使って少しずつレオの毛を切っていく。しばらく切ってからハサミを止めて、ルーシーがアラに回収してもらう。

普段ならめんどくさがるだろうアラも、毛をしっかりと回収してくれている。なんだかんだレオとはしっかりと仲良しだからな。

「それにしても、レオの毛って本当にふわふわだよね」

「そうですね……こうして触っているだけで眠くなっちゃいそうです……」

後ろの方でシルフィとロキシシーが会話する声が聞こえてくる。一方で前足を抑えてくれているエリスはというと、

「うふ……うふふふ……」

あーこれはキマツてますわ。しっかりとヘブン状態ですね。心なしかレオも若干怯えてる様に見える。

普段はレオが嫌がるから毛並みを堪能できてないしな……最近はどう力加減を覚えたから思いつきり抱きしめる事は無いと思うが、一度ついた苦手意識を拭えという方が可哀想だろう。エリスの抱き締め欲は俺で発散してもらおう他にない。

「くうくん……」

「よしよし、もうすぐ終わるからなレオ、ご褒美にお高い肉を買ってやるぞ」

「ワンッ！」

やや怯え気味のレオにおやつをあげて宥めつつハサミを進めていく。

そうしている内に頭側から前足、胴に向けて切ってきた俺が尻尾側から同じように切ってきたシルフィとお腹の辺りで合流するくらいまで切り進めた。

残りは俺一人で全体を調整してカットは終了だ。

「ワンッ！」

「大分涼しそうになったな」

毛を切った事で一回りシルエットが小さくなった様にも見える。レオ・サマーカット仕様と言ったところか、これはすごい達成感だ。レオも嬉しそうだ。尻尾が扇風機みたいにブンブン回ってるし。

「この後はどうするんですか?」

「俺がお風呂に入れて、残ってる毛を流してから乾かします」

「ではあちらは?」

ロキシシーが指差したのはルーシーとララが集めてくれた毛を入れた袋だ。

あ、手をわきわきさせてるエリスをシルフィが抑えようとしてる。

「何かに使えるかもしれないし、とりあえず置いときましょうか」

「わかりました、ではよろしくお願いします」

そう言つてロキシシーもエリスを抑えに回った。狂剣王パワー、恐るべし……

「じゃあレオ、風呂行くか」

「ワンツ！」

風呂でレオを洗つて温風で乾かした後、リビングにレオを連れて行った。

「おお、さっぱりしましたね、レオ」

「ワン！」

声をかけたロキシシーに頭をこすりつけて、レオは本当に嬉しそうだ。

「ララ、レオなんて?」

「……いつものお風呂より気持ちよかつたつて」

「そっか、良かった」

普段は櫛で梳かしてあげたり軽く毛先を整える程度でレオの毛をここまで短くカットはしなかつたからな、レオも初めての体験だっただろう。

人間だつて髪を切ってもらつた後のシャンプーは気持ちいいもんな。

「レオ、ふかふかー!」

「ふかー!」

「ワフツ!」

おお、さつそく子供達が飛びついてるな。

つてさつきまで俺と話してたのにララはいつの間にかレオの背中にポジションを取ってるし：キイーっ!羨ましくなんかあるんだからね!

「それでルディ、レオの毛はどうするの?」

ハンカチを取り出して噛もうかと悩んでいるとシルフィが例の袋を持ってきた。

中身は毛だからそんなに重くないと思うが、大きさは子供一人分くらいはある。さてどうしようか……捨てるのは勿体無い気もする。

「私にちょうだい!」

「もらつてどうするのさ」

「抱き枕にするわ!」

「ああ、良いねそれ。ボクもちよつと欲しいかも……」

抱き枕か。良いなそれ、よく眠れそうだしそうしてみるか。駄目そうならその時は捨てればいい。

「じゃあレオの毛は抱き枕にしようか、せつかくだしたただ袋に詰めるだけじゃなくてこんな感じにしてみたらどうかかな」

そう言いながら手を丸めて耳の形を作る。子猫ならぬ子犬が欲しいワンのポーズだ。

……二人の目の色が変わった気がするのには気のせいだと思つておこう。

「とつ、とにかく!耳とか鼻とかの飾りをつければ同じ抱き枕でも違いが出て来るんじゃないかなつて事!」

「良いわね……」

「うん、良いね……!」

二人とも、抱き枕についての感想だよね?

抱き枕と言ってもそう難しいものではない。用意したカバーにレオの毛を詰めれば完了だ。

それにしても聖獣の毛を使った枕か、何かご利益がありそうだな。販売とкаしたら獣族に怒られそうでもあるが。

「シルフィって絵も上手いのね」

「そうかな？エへへ……」

シルフィは枕カバーにレオの絵を描いている。コレがまた味のあ
る絵だ、いい具合にデフォルメが効いていて幼児番組とかに出てそ
う。

「はい出来たよ。じゃあエリス、レオの毛を詰めちゃって」

「わかったわ」

「までもふもふに魅了されちゃダメだからね」

「わかってるわよ……」

レオの顔を描き終わったシルフィから枕を受け取り、袋の口をエリ
スに向けて固定する。

その枕に毛を詰めていくエリスの顔は幸せを隠しきれていないが、
手は止まっていないし大丈夫だろう。なんならちよつと羨ましい。

エリスが詰め終わったら再びシルフィに枕を渡して口を縫っても
らい完成だ。

「かわいい……！」

「おお、思ったより様になってるな」

「……………」

その出来栄えたるやエリスが目を据わらせて手をわきわきさせる
事からも明らかだ。

「駄目だよエリス、寝る時までのお楽しみだからね」

「わ、わかってるわ」

「じゃあ折角だし、子供達にも見せに行こうか」

そう言いながら枕を抱えて立ち上がる。

きつとみんな大喜びだ。またこういう機会があれば、今度はぬいぐるみなんか作ってみても良いかもしれないな。

ちなみに。

夜、抱き枕を使ってみようと寝室に向かったらシルフィ達が勢揃いしていて、三人の前で昼間の子犬が欲しいワンポーズをさせられたのはまた別の話だ。

龍神教室

わからない。

今日、学校で出された魔術の宿題が難しくてよくわからない。昔ママたちから似たような事を教わった気がするけど忘れてしまった。わからないなら、誰かに聞けばいい。でも誰に聞けばいいのだろうか。

魔術の事だから白ママに聞こうかな。でも一度教えてもらった事だから聞きづらい。

青ママはこの宿題を出した本人だから、聞くのはズルだと思う。

赤ママたちは魔術の事はよく分からないって言った。

パパが一番ダメ。今日はお休みで家にいるけど、こんなところがわからないと思われたら褒めてもらえない。期待してもらえない。

どうしよう……。

「……そうだ」

一人、教えてもらえそうな人がいた。

忙しい人だからお出かけしてるかもしれないけど、もし居たら教えてもらえる。

そう思っって私は宿題と筆箱をカバンに入れて家を出た。

目的地にはしばらく歩けば着いた。建物からなんだか重たい空気が漂ってきているから、目的の人は居るみたい。

建物の中に入って、あの人がいつも居る書齋の前へ。入る前にパパやママたちから教わった通りの挨拶をする。

「オルステッドさまー！いらっしやいますかー！」

「ああ、入るがいい」

わからなければ、人に聞きなさい。

青ママの言葉通り、パパの上司、オルステッドさんを訪ねてみた。

——オルステッド視点——

「オルステッドさまー！いらっしやいますかー！」

いつもの様に書齋で書類を書いていると、客が来たようだ。

この声はルーシーか。気配からして一人で来たようだが、ルーデウス達は知っているのだろうか。

「ああ、入るがいい」

書類の大半は龍神語で書いてある。見られても問題は無い。

そう判断して、ルーシーを書齋の中へ招いた。

「一人か？その鞆はどうした？」

「はい！オルステッドさまにお聞きしたい事があつて来ました！」

親の教育の賜物だろう、礼儀正しい子だ。

よいしょとルーシーは手に持った鞆を机に置いた。

どうやら聞きたい事というのはその鞆に関わる事らしいが……。

「それで、聞きたい事とは何だ？」

「学校の宿題、教えてください！」

学校の宿題。

学校とはルーシーが通っていて、ルーデウス達も通っていたラノア魔法大学の事か。確かルーシーの入学初日にルーデウスに俺の兜とコートを貸したのだったか。

いやそれはいい。確かに俺はルーシーに魔術のコツなどを教えた事はあるが、教師として優秀では無い事は自覚している。ルーデウスに教えた時も教えた物とは少し違う魔術が飛び出してきて驚いたものだ。

「……俺でいいのか？今日はルーデウスが家に居るだろう」

「パパたちには聞きづらくて……」

なるほど。ルーシーは優秀な子だ。そして頑張り屋だ。多少の臆目が入っている自覚はあるが、それでも両親に認めて貰おうと頑張っている姿を知っている。

何かしら思う所があるのだろう。

「わかった、見せてみるがいい」

「……！ありがとうございます！」

ルーシーが持ってきたのは魔術の課題だった。そう難しいものではないが、やや捻ってはあるか。少なくともルーシーの年齢で解かせられる物ではあるまい。

もつとも、あの学校は入学に年齢を問わない。そんな中7歳から学校に通い始め、それ以前からも魔術や剣術の指導を受け、問題なく授業に着いて行けるルーシーの方が早熟だと言える。そのルーシーならば、基礎的な理論と少しのヒントを出してやれば自力で解答に行き着けるだろう。

「む……」

理論の説明を止めてルーシーを見ると、目を回していた。

やはり俺は教師としては落第らしい。

「少し休憩にするか」

「……はい」

事務所に備え付けてある非常食の中から子供が喜びそうな甘いものを選び、紅茶を淹れる。

昔、ペルギウスの許に居た頃に覚えた物だ。

「ありがとうございますー！」

普段は姉として気を張っている部分もあるのだろう、やや大人びた印象もある子だが、甘いものと紅茶を見て顔を綻ばせるあたりはまだまだ子供らしい。

「美味しいですー！」

「そうか」

その答えを微笑ましく思いつつ自分の紅茶を口に運ぶ。

……少し砂糖を入れすぎたか。もしかすると気を遣われてしまったかもしれない。

「食べ終わったら庭に出て、今教えた事を実際にやってみるといい」

食後の運動がてらに丁度良からう。書きつけて覚えるよりも実地でやった方が覚えは良いはずだ。

「わかりました！」

食休みを挟んで庭に出た。

ルーシーは鞆の中から取り出した杖を持っていくつかの魔術を使っている。表情からして先ほど教えた理論に納得が行ったのだろう。

俺は実例を見せてやれないにも関わらず、優秀な子だ。

「ふむ」

しかし机での勉強に加え、魔術を連続で使ってルーシーも疲れている様に見える。

時刻はそろそろ夕方だ。今日はもう帰してやるのが良いだろう。

「ルーシー、そろそろ帰った方が良からう」

「まだできます」

「そうではない。ルーデウス達に話してから来たのか？この時間だ、きつと心配しているぞ」

「……わかりました」

呪い防止の兜を被り直し、土産に気に入りそうな本をいくつか持たせたルーシーを抱き上げる。

シャリアアは他の町と比べて治安が良いが、それでも疲れた子供一人、帰らせない方が良いだろうからな。

「着いたぞ」

と言っても事務所からルーデウスの家まではすぐだ。日が落ちるまでには着く。

もつともその僅かな間に、ルーシーは俺にしがみ付いて船を漕ぎ始めたが。やはり疲れていたのだろう。

いつものように絡みついてくるトウレントを傷つけないよう引き剥がしながら敷地に入ると、ちょうど玄関から出てきたルーデウスと目があつた。

「あれ、オルステッド様……とルーシー！」

「出かけるのか」

「ええ、まあ、ルーシーを迎えに行こうかと……傭兵団からルーシーが事務所向かったのは聞いてたんですが、帰りが遅いので迷子になっ

たかと思つたもので」

なるほど、それで杖だけではなく魔導鎧まで着込んでいるのか。

この子達は本当に大事にされている。やはりもう少し早く送ってやるべきだったな。

「宿題を教えてくれと言われてな」

「ああ、それは……ありがとうございます」

「気にする必要は無い」

そう言いながらルーデウスにルーシーを引き渡した。

それにしても本当によく眠っている。これほど近い距離で子供の寝顔など見れる日が来るとは、かつては思いもしなかった。

「あ、ほらルーシー、オルステッド様帰っちゃうぞ、ちゃんとお礼言つたのか？」

「構わん、寝させてやれ。ではな」

いつもとは逆に、見送る側となったルーデウスの視線を背中に踵を返す。少し寂しい気がするのは今日一日ルーシーと一緒にいたせいだろう。

そんな感傷を悪くないと思いつつながら、俺は事務所への家路を急いだ。

明後日。

事務所にやってきたルーデウスから、ルーシーが例の宿題を基にしたテストで満点を取ったのだとだらしない顔で自慢された。

やはり、優秀な子だ。

寂しがり屋のお母さん

ある日の昼下がり、私は暇を持て余していた。

というのも、ルイジェルドさんが『たまには一人でゆっくり過ごす時間も必要だと聞いた』と言って、最近歩けるようになってきたルイシェリアを連れて朝から出かけてしまったからだ。

出かける前にルイシェリアにどこに出かけるの？と聞いたら可愛いらしい満面の笑みでナイシヨ！と言われたから、もしかするとこのお出かけはルイシェリアから言い出した物なのかもしれない。

そうして出かけて行った二人には申し訳ないが、私にはあまり趣味と呼べる物がないから何をしたいのか分からない。数少ない趣味である釣りに出かけてもいいけど、釣れすぎてしまうとそれはそれで困る。晩ごはんは二人が何か選んで買って帰ってくると言っていたから、今日はそれを楽しみに待っていたい。特にルイシェリアが何を買ってきてくれるのが楽しみだ。

ごはんの用意以外の家事をしようにも普段からこまめにやっているから掃除や洗濯物もすぐに片付いてしまって、折角だからといつもより多めにこなした日課の素振りや走り込みも昼過ぎには限界を迎えてしまった。

「また兄さんが何か吹き込んだんでしょうね……」

疲れた体を休ませる為にルイジェルドさんと二人で使っている布団で寝転びながら、二人と過ごす時間以上に幸せな時間なんてないのに、と疲労とは別の理由で自然とため息が漏れてしまう。

とはいえ兄さんにしるルイジェルドさんにしる、私に気を遣ったの行動だろうから文句はない。あるとすれば……

「私も一緒にお出かけ、したかったなあ」

そんな、まるで一人だけ仲間はずれにされたような疎外感だけだ。

もう母親なのに子供みたいでみっともないと思わないでもないけれど、それでも寂しいものは寂しい。

そんな気持ちを持って余しながら、布団をごろごろと転げ回っていた事に自分が立てた音でようやく気づいた。いよいよみっともないと

言うか、あられも無い。

それにしても自分が立てた音さえあんなに大きく響くなんて。誰も居ないだけで家がこんなに静かで、そして寂しくなるなんて知らなかった。

昔、お父さんが捜索団の仕事で忙しくしていた頃なら寂しさを募らせて、部屋のすみっこで丸くなって泣いたり、ワガママを言ったりしたかもしれないけど、きつと我慢できただろう。

けど今はダメだ。シャリーアのグレイラット家で兄さんたちと、魔法大学の寮でメリツサ先輩たちと生活を始めて。ずつと憧れていたルイジェルドさんと結婚して、ルイシェリアが産まれてきてくれた。私はどんどん寂しがり屋の欲張りになっていった。

だから、寂しい。二人が帰って来るのが待ち遠しくてたまらない。

「お昼寝でも、しようかな」

折角ゆっくりしろと言ってくれたんだし、二人が帰ってくるまで寝てしまうことにしよう。

「……そうだ」

ふと思いついて、洗濯籠の中からまだ洗っていないルイジェルドさんの上着を取り出した。ほんのかすかに嗅ぎ慣れた彼の匂いがして、寂しさを埋めてくれる気がする。

なんだか良くない事をしている気分になるけど、これならよく眠れそう。二人が帰って来る前に戻せば、きつと大丈夫。

ルイジェルドさんが帰ってきたら寂しかったといっぱい甘えて、晩ごはんを選んでくれたルイシェリアもいっぱい甘やかしてあげたいな……。

——ルイジェルド視点——

スペルド族の生まれ故郷が見たいとせがむルイシェリアを連れて、もう10年以上足を運んでいなかった魔大陸へ転移魔法陣で向かい、そして戻ってきた。

帰りにシャリーアの市場に立ち寄って、『おかあさん、きつとよろこ

ぶよ！』などと言いながらお菓子を買い込もうとするルイシエエアを宥めながら夕食と食後の菓子を選び、家に着く頃にはもう夕方だ。

ルーデウスやエリスから聞いていたノルンの好みを基に選んできたが、喜んでもらえるだろうか。

「ノルン、帰ったぞ」

「おかあさん！ただいまー！」

返事がない。俺の腕の中でルイシエエアも怪訝そうにしている。

家に居る事は分かっているのだが。

「ノルン？」

「おとうさん、あそこあそこ！」

ルイシエエアの指差す先、普段二人で共寝をしている布団の上に彼女は居た。

なぜか俺の服を抱きしめて。

「おかあさん、寝てるの？」

「そうだな、もう少し寝させてあげよう」

まだ時間はある。ノルンが起きてから、三人で食べればいい。

そう思ってノルンに布団をかける。

その寝顔は昔ルーデウスの許へ向かうために旅をしていた頃と変わらないが……今は何よりも愛おしく思うのは、お互いの関係が変わったからだろうか。

「今度はおかあさんといっしょがいい」

そう言いながら、ルイシエエアはノルンの側に自分が一番気に入っているという布人形を置いてやっていた。

「そうだな、今度出かける時は三人でだな。ノルン、ルイシエエア」

そう言いながら金色の髪を撫でると、ノルンの口の端が少しだけ緩んだ気がした。

証明写真

懐かしい夢を見ていると思った。

『ララ姉ーやめてってば』

『えへへーおねえちゃんたちののまねー!』

『クリス、あんまり動くし落ちちゃうよ?』

『道具ばかりいいじくってないでちゃんと前を見ろよ、リリ』

『わかりました。でもさいごにこれだけ』

『言ったそばから!ララ姉も止めろよ!』

ジークの頬を上向きに歪ませていた私は、アルスの言葉にいったいどう答えたんだっけ?

思い出せない。けれど、確かそのすぐ後に父が……。

『ほらほら喧嘩してないで、それじゃあお願いします』

そうだった。その後父が作ったというカメラで魔道具が発動して、結局ジークは変な顔になっちゃったし、リリは道具箱から顔を上げただけ姿で写ったんだった。

だから何も答えていない、が正解だったのだ。

家族みんなで撮った事は覚えていても何を話したかまでは覚えていない。そんな自分は薄情なのかもしれないと思いつつながら自分の意識が浮上していくのを感じた。

「ん……」

ひどく悲しい気持ちで目を覚ました。

グレイラット家を出てからもうしばらく経つが、いつまで経っても一人で起きるのには慣れそうにない。

「わふー!」

「そうだった、おまえが居たねレオ」

枕代わりになっていたレオが自分を忘れるとは何事か!と抗議をかけてくる。朝から念話は頭に響くのでやめてほしい。

赤ん坊の頃からずっと一緒にいたからもう自分の一部みたいな感覚なだけ。今度高い肉を買ってあげるからそれで勘弁してくれないだろうか。

「くうくうん……」

「わ、ちよっ何」

レオの懐柔策を考えながら温かな毛並みを堪能していると、レオがぺろぺろと私の顔を舐めてきた。

まるで慰めているかのよう。

「泣いてるって……私が？」

「わん」

「そっかー……」

夢が原因だろう。夢見が悪かった。いや今はもう会えない家族に会えたんだから、その点に関しては良かったと言うべきなのかもしれないけれど。

夢にまで見た写真を懐から取り出す。何度も見返しているせいかもしれない。もうかなり色褪せてきているけれど、何度見ても変わらず暖かな大切な一枚。

それぞれの表情で写るきょうだいたち、最後にあつた時よりいくらか幼く見える叔母たち、結局死に目に立ち会う事ができなかった祖母ふたり。そしていつまで経ってもその背中すら見えてこない両親の笑顔。

家族みんなが持っている、家族の証明。

「……ん、もう大丈夫。私も馬鹿だね」

心配そうに見上げてくるレオの頭をわしゃわしゃと一撫で。

だいたい、細かい会話を覚えてないからなんだと言うのか。私は覚えていない。お姉ちゃんに真面目に勉強しろとお説教された思い出も、アルストジークと一緒にイタズラをして叱られた日々も、リリと二人で魔道具の実験をした時の高揚も、クリスがアスラの王子と結婚して夢を叶えたと聞いた時の密かな驚愕も。

父と三人の母から貰った大切な私の宝物だって同じ。離れていても、たとえ誰かが先に居なくなっても、私たちはかつてあのグレイ

ラット家で共に過ごした家族。それだけは何があっても変わらない。その事を思えば悲しい気持ちは引つ込んで、自然と口角が上がっていた。

「それじゃ、行こっかレオ。次はミリス大陸に向かうから……お姉ちゃんの所に顔でも出してみよう」

「わんっ！」

大切な思い出を懐にしまつて歩き出す。

姉に会うのが楽しみだ。またお小言を頂戴するかもしれないけれど、それでも良い。そうした事がきつとたまらなく嬉しいのだから。

香りに誘われて

「グギャアアアア!!」

断末魔が森に響く。

叫び声の主は脳天を割られ、頭蓋を岩砲弾に破壊された赤竜だ。

俺とエリスはある街の近くに出現するはぐれ竜を討伐にやってきた。勿論オルステッドからの指令である。それにしてもいつ見てもでっけえなドラゴンって。

とはいえ俺もエリスももう人の親、今更赤竜の一匹くらいでキヤツキヤするほどお子ちゃまでは、

「やったわねー!」

「ああ!」

ありました。だってかっこいいじゃんドラゴン! ああしかしドラゴンの上で良い笑顔のエリスは返り血まみれだが大丈夫だろうか、不死身になったりしちやうのかしら。

冗談はさておき。とりあえずエリスの血を流して、ドラゴンからは持てる分だけ素材を剥ぎ取って、残りはアンデットにならないようにバラしてから着火と。

「……ん?」

「どうしたのよ」

赤竜の死体を解体していると口から手のひら大の硬い石の様な物が出てきた。もうずいぶん前になるが前に倒した赤竜からはこんな物が出なかつたし、食べ残しの骨……という感じでもない。

それどころかなんかい匂いがする、少なくとも毒物ではなさそうだ。

持って帰ってみるか。

「竜涎香だ」

一旦エリスと別れて、報告がたら持ち帰ったブツをオルステッドに

見せてみたところ、珍しい物を見つけたなど前置きした後でその名称を告げられた。

竜涎香ってアレか？あの超高いお香のヤツか？でもアレって竜の涎って名前はただの例えで、本当はクジラの体内で出来るんだっただよな？

え？何？この世界では本当に竜の涎でできてんの？じゃあこれ涎なの？ばっちいの？

「長い時を生きたドラゴンが、ごく限られた条件下でのみ生成する物だ。よって希少価値が高く、高値で取引される」

「ではオルステッド様はこれが必要であるの赤竜を？」

まさかとは思うが金に困っているのだろうか。社長の破産は我が家の破産なのだが。

「いや、俺の知る限りあの街に出現する赤竜は竜涎香を生成した事は無かった。それはお前が見つけた物だ、売るなり使うなりお前の好きにするが良い」

「はあ……ではありがたく使わせていただきます」

そう言っただけで俺は事務所を退出した。

使い方を聞いた時の社長、なんか微妙な顔してたけどなんだっただろうか……。

「それ、お香だったのね」

「ああ、けどあんまりドラゴン！って感じはしないよな」

「なによそれ」

クスクスとおかしい事を聞いた様に微笑むエリス。そんなにおかしい事言ったかな。

「けど、いい香りね」

「そうだな」

曰く、火にかけて香油にするのが一般的な使い方らしい。なので土魔術で鍋を作って焦げ付かないよう弱火でゆっくりと溶かしていく。

匂いが籠らないように庭に出たが、それでもいい香りが漂ってくる。思っていたより柔らかいというか、野生味は全く感じない。むしろお寺とかで焚かれてそうな神秘的な匂いだ。高値で取引されるというのも分かる気がする。

「ねえルーデウス」

「うん？」

「こうしてると昔を思い出すわね」

「冒険者をしてた頃？」

「そうね、ルーデウスが火の番をしてくれてたわ」

「魔術で火を熾するのが手っ取り早かったからね」

そう言いながら隣に座るエリスの肩に頭を預ける。なんとなくそうしたくなつた。昔を思い出したからかもしれない。

「エリス」

「何よ」

「ちよつとだけこうしていい？」

「いいわよ」

しばらくの間、夜の冷えた空気とエリスの体温を感じながら鍋の中身をかき混ぜる。エリスの匂いと香油の香りが混ざって心地いい。

「ねえ、ルーデウス」

「なあに」

「それ、何に使うの？」

「なんでも寝室に置くと良いらしいよ」

多分安眠効果とかだろう。喋っている間にオイルはもう溶け切っている。

「ふうん……じゃあそれ今から寝室に置きに行くの？」

「そうだな、瓶に詰めて棒を入れるんだ」

香油の一般的な使い方という物はシルフィから聞いた。香りを楽しみたいならコレらしい。寝室に置くと良いと教えてくれたのも彼女だし、流星の女子力だ。

ちなみに取ってきたのは竜涎香だと伝えるとなんか顔を赤くしていた。オルステッドと言い本当になんでだろうね。

「じゃあ出来たから、置きに行こうか」

「そうね」

鍋を片手に立ち上がると空いている方の腕をエリスに絡め取られた。あらやだ大胆だわカレったら、しっかりエスコートしてくださいまし。

寝室に到着した。両腕が塞がっている俺の代わりにエリスが扉の開け閉めとかを全部やってくれた。流石のエスコートである。

あらかじめ用意しておいた瓶に油を移し替える。どれくらいになるか分からないのでやや大きめのを選んだが、ピッタリそうで何よりだ。続いて棒を半分くらい瓶の口から出るように調整しつつ油の中へ差し込んで完成だ。

「すぐには香ってこないのね」

「しばらくかかるんだってさ」

棒を伝って油が揮発するからなんだとか。香り始めたら1ヶ月くらいは持つらしい。伝聞ばかりだな。

少しの間エリスと今日の事や近況について話していると、少しずつ香りが立ち始めた。

「いい香りね……」

そう告げるエリスの声は心なしか酔っているように聞こえて、俺は彼女の顔を直視できずにいる。

なんなんだこの空気。そんなつもりは無かったのになぜだかそんなムードになっている。これがお香の力か。

「ルーデウス」

「エリス」

二人の声が被って、エリスの視線が俺を捉えて離さないのを感じて。次の瞬間にはエリスに押し倒されていた。

さて。普段よりも激しい……というか激し過ぎた蹂躪の果ての腰

痛を除けば気持ちの良い朝だ。

エリスもすでに起き上がっていったらしく布団の隣には微かな温もりだけが残っていた。

「あ、おはようルデイ」

目を擦りながら部屋から出るとちょうど扉に手をかけようとしていたらしいシルフィが廊下にいた。

起こしに来てくれたのだろうか。ちょうど良いからここで聞いてしまうか。

「おはよう……なあシルフィ、あの香油って……」

「あ、やっぱり知らなかったんだ。さっきエリスにも同じ事を聞かれたんだ」

そうだったのか。やっぱり何か謂れがある物なんだろうな。

「竜涎香ってね、お香としても有名で、アスラ王宮でも使われるものなんだけど……」

やっぱり由緒正しい物だったらしい。

ん？アスラ？

「夜の生活を円滑にする目的で焚かれるっていうか……要は媚薬なんだよ」

「そうだったのか……」

道理で、そんなつもりもないのに変なムードになると思った。エリスには悪い事をしたな。

「それでねルデイ」

「ん？」

エリスにどう謝ろうか考えていたら、上目遣いでこちらを見ているシルフィに話しかけられた。

「まだお香、余ってるよね？」

「……うん？そりやまあ」

耳をパタパタ、指をモジモジ、大変可愛らしい。

予見眼とか関係なく今からシルフィが何を言おうとしているのかわかる気がする。

「朝からこんな事言うのもなんだけど、今日ボクの日でしょ？だから

……」

「分かった、用意しておくよ」

「ホント? やった」

小躍りしそうな勢いで喜ぶシルフィを見て、竜涎香を手に入れた幸運に感謝した。

きっと香油がなくなるまでの約一ヶ月、寝室からあの香りが絶えることは無いだろう。

短編三本

あなたが善い夢を見れますように

「~~~~~♪」

鼻歌混じりで夜の街を歩く。

今日は元々護衛の日だったけど、アリエル様とおぼあちゃんの人前ではとても出来ないようなお話が大盛り上がりしちゃって、今日は急遽帰っても良い事になった。

お仕事が嫌ってわけじゃないけど、ルデイと過ごせる時間が少しでも増えるのが嬉しい。とはいえもう遅いから、ルデイはもう寝ちゃってるかもしれないのは残念かな。

けどそれはそれでルデイの寝顔を眺めたりとか、朝起きたルデイがびっくりしてボクを抱きしめてくれそうだったりとか、別の楽しみがある。いずれにせよ踊るような心地でボクは家のドアを開けた。

「ただいまー」

返事はない。やつぱりもう寝ちゃってるみたい。

ボクももう晩ごはんは食べちゃってるし、パジャマに着替えてルデイの部屋に行ってみようかな。

「んん……ああ……」

起こさないように気をつけながらルデイの部屋に入って、最初に聞こえて来たのは魘されているような呻き声だった。

そしてはじめて一緒に寝た時のような、苦しそうな寝顔。今、ルデイはきつと辛い夢を見ている。

そんな夢を見ているなら起こしちゃうっても構わない。そんな気持ちでゆっくりと頬に触れてみる。

「……ん」

すると安堵したような息が漏れて、表情が和らいだ。起きている時より幼くて可愛くて、ブエナ村で遊んでいた頃を思い出させてくれる、そんな安らいだ寝顔。

「……良かった」

その寝顔を見ていたら、ボクも眠くなって来た。

起こさないよう慎重にルデイの腕の中へ体を滑り込ませて、抱きしめられる格好で目を閉じる。ここはボクが一番安心できる場所だ。

暗くなつていく意識の中で、ルデイにとつてもそうなら良いなと思つた。ボクを抱きしめていたら安心して、辛い夢なんか見なくなつて、いつもそんな安らかな顔をしていてくれたら良いな。

ふたりの三つ編み

「ふわ〜あ……」

ある日の午後、ララはいつもの昼寝から目を覚ました。

と同時に、自分と、枕代わりになっていたレオの後ろに誰かの気配を察知した。

救世主云々とは関係無く、日々のイタズラとそれに伴うお叱りによつて体得した防衛本能である。

「おや、起きたんですかララ、おはようございます」

「……おはよう、今日はまだ何もしてないけど、」

何かあつた？と聞こうとしたララの背後にいたのは彼女を産んだ母親、青ママことロキシィであった。

青い髪の毛がこの時間に家にいるのは珍しい、もしや昨日母の部屋に仕掛けたイタズラがバレでもしたかとララは身を固くした。

「今日は？」

「なんでもない」

危うく藪をつつく所だった、と吹けていない口笛を吹きながら必死に目を逸らすララの様子にいつものイタズラですねとロキシィはあたりをつけた。

もつとも、今のララにある用事はその事ではない。

「ララ、今日あなたは夕方から魔法大学で研究発表の予定があつたと思つたのですが」

「……あ」

「忘れてたんですね」

「準備はできてる、レオの毛が気持ち良すぎて、寝ちやつただけ。今か

ら出れば間に合う」

えっ自分のせい？という顔をしているレオをよそにララは無表情ながら慌てて制服を着て出かけようする。

その身なりをロキシシーが見咎めて呼び止めた。

「待ちなさいララ、寝癖酷いですよ」

「仕方ない、我慢する」

「駄目です、なるべく手早くしてあげますからこっちに來てください」
「……わかった」

渋々と言った様子でララはロキシシーに背中を向けて座り、ロキシシーが元々持っていたらしい櫛でララの髪の毛を梳き始めた。

「青ママ、上手」

「そうですか？まあ、わたしももう6人のお母さんですからね」

「青ママ、手が止まってる、はやく」

「もう櫛は終わったんです！じゃあ三つ編み作っちゃいますから動かないでください」

「わかった、お願い」

先ほどの櫛以上に慣れた手つきでロキシシーが三つ編みを作り始める。

無詠唱魔術で水鏡を作り、母の様子を見たララはおー、とまるで他人事のように感嘆の声をあげていた。

「はい、出来ましたよ。どうですか？」

「すごい上手、なんで？」

「なんでと言われても……わたしはずっと三つ編みですし。前にシルフィに髪の毛の整え方とか習いましたしね」

「そうなんだ……ありがとう」

「どういたしまして。ほら早く行かないと本当に遅刻しちゃいますよ」

「そうだった、行くよレオ」

起きていたレオと連れ立ってララがリビングから外に出ようとする。

「いってらっしゃい、気をつけるんですよ」

「わかってる、行ってきます」

小走りで庭に出てレオに跨り魔法大学へ向かうララ。その姿に冒険者時代の自分を重ねてロキシシーは困ったように笑うのだった。

数時間後、ロキシシーの部屋に仕掛けたイタズラが露見し、尻叩きの刑に処される事をララはまだ知らない……。

午前零時にお嬢様と

それはエリスが（そこそこ）真面目に授業を受け始めたある日の事である。

珍しく夜中に目を覚まし、暇を持て余していたエリスは屋敷の中なら安全だろうと考えて散歩をしていた。

昼間は明るく、喧騒に包まれている屋敷も夜は静寂そのもの。まるで知らない世界に迷い込んだような心地でエリスは歩を進めていた。

そんなエリスが異変に気付いたのは、ルーデウスの部屋の前を通りかかった時である。

「なんの音かしら……」

聞こえて来るのはカタカタと家鳴りの様な音。

ひよつとしたらルーデウスも自分と同じ様に起きていて、何か作業をしているのかもしれない。そう思ったエリスはルーデウスの部屋へ入ることにした。

「ルーデウスも起きてるの!？」

豪快な音と共に開け放たれるドア。ルーデウスが居れば近所迷惑ですよ等と言う所であろう。

「……誰も居ないじゃない」

しかし注意の声は飛んでこない。なぜなら蝋燭に火こそ灯されているものの、ルーデウスは不在だったからだ。

部屋の窓は開け放たれ、風がドアと蝋燭の火を揺らしている。

「……ルーデウス? 本当に居ないの?」

もしかして隠れているのか、あるいはいつかの様に誘拐されてしまったのではないか。慌てそうになった所でエリスは開かれた窓の

向こう側に太い縄が垂れ下がっているのを発見した。

軽く引つ張ってみると確かな手応えが手に伝わってくる。恐らく自分の全体重をかけても大丈夫だろう。そう考えてエリスは縄を伝って登り始めた。

「なんでこんなところに居るのよ」

「あれ？エリス？」

縄を登った果ては屋敷の屋上だった。そこに居たルーデウスは膝に毛布をかけ、その上に読みかけの本を置いてぼんやりとした——エリスからすれば少し寂しそうな様子だった。

「それで！何してるのよ！」

「星を見てたんですよ」

眠れなかったので、と言いながら頭上を指差したルーデウスにつられてエリスも空を見上げる。

そこには満天の星空があった。こんな時間に起きて外に居るのはそれこそ誘拐事件以来だったエリスにとっては見た事もない様な星空だった。

「でも星なんか見てどうするのよ！」

「別に何をするってわけでもないですよ、こうしてればそのうち眠くなるかなと思っただくらいで」

「ふーん……」

納得していないながらもエリスはルーデウスの隣に寝転がりルーデウスと同じ毛布に入った。月明かりだけがお互いを照らしているが故に顔がよく見えなかったのはルーデウスにとって幸いな事だっただろう。

「なら私も寝られないから、一緒に見るわ！いつもみたい星について教えなさい！」

「はいはい、お嬢様」

苦笑しながら応じたルーデウスも寝転がる。

まずは月と星の説明から。夜は長い、どこまで聞いてもらえるかは分からないが、お互いが眠りにつくまでは話を聞いてもらえるだろう

う。き。と。

入浴剤？

最近子供達がお風呂を嫌がると相談を受けた。

だいぶ前にルーシーがエリスのシャンプーを嫌がってお風呂場から飛び出してきた事があったが、どうもそういうのとは違うらしい。

聞き取り調査をしてくれたシルフィが言うには、

「お風呂に浸かるのがつまらないんだってさ」

らしい。主にやんちゃ盛りの子とアルスの意見だという。

聞いた当初はちよつと愕然としたものだが、よく考えてみれば俺も前世の子供の頃は肩まで浸かって10数えなさいとか言われても途中で飽きて逃げ出したりした記憶があるから、仕方がないのかもしれない。

しかし仕方がないですませていい話でもない。ちゃんと温まらない内にお風呂から上がってしまうといくら解毒魔術があるからと言つても風邪をひいてしまうかもしれないし、何より子供達がお風呂を嫌がるようになってしまったらこれから先湯船という文化の継承が途切れ……まあそれはいいか。

とにかくこのままだとお風呂に入る事自体を面倒くさがる可能性もあるかもしれないので、どうにかしないとイケないな。

「相談なんだけど入浴剤の作り方を教えてくれ、ナナホシ」
「入浴剤」

というわけでやってきました空中城塞ケイオスブレイカー。

もちろんナナホシへの手土産も忘れずに。今回は蕎麦もどきとコロツケを持ってきたが大喜びだった。揚げたてのサクサクホクホク感を楽しむ用とお出汁に浮かべてしつとり頂く用でいくつか用意したのでモリモリ食べてもらいたい。

「いやな、聞いてくれよナナホシ。最近子供達が湯船に浸かるのを嫌がるんだ」

「子供なら普通じゃないかしら」

「でもせっかく作ったんだしせっかくなら使って欲しいんだよ」

「浸かるだけに。我ながら上手いな……。」

そんな事を思っているとナナホシにジト目で見られている。オジサンとか思われてるのか……?」

「……はあ。それで、なんで入浴剤なのよ」

「いや香りとか泡とかつけたら子供達だけじゃなくてみんな喜ぶんじゃないかなって」

そう答えるとナナホシは顎に手をやって真剣に悩み始めた。

自分でも無茶振りをしている自覚はある。ああいうのは温泉の成分を再現したものが多かったように記憶しているが、こっちはそんな設備ないだろうしな……。」

「ねえ、別に誰かが腰痛になったとかじゃないのよね?」

「ああ、みんな健康そのものだよ」

「そう……それならハーブをお湯に浸けてみるとかでもいいんじゃない?」

「ハーブ?」

ハーブティーでも作れというのだろうか。そしてお風呂に入りながら……風呂に入ってる人の出汁まで取れそうだな、シルフィ達のなら喜んで飲めるが。

「前に聞いた事があるのよね、アストラ王国ではお風呂に香草を浮かべるとかなんとか……ちよつと違うけど日本でもゆず湯とかあったでしょ?」

「ああ!冬至の日のアレか!」

そういえばそんなのもあった。クリスマスとかハロウィンみたいなイベント事は覚えてても暦の出来事は忘れつつあるな。日記に書いておこう。

「そういえばこの前庭園で柑橘系っぽい果物を見たわね」

「ならペルギウス様に聞いていくつか貰って帰るか」

その後、コロッケ蕎麦を献上して代わりにオレンジっぽい果物とオマケを何種類か貰って帰った。

ちなみに食用で美味しいらしい。それこそハーブティーにでも入れるのか、あるいは製菓用かもしれないが……風呂に入れると言ったら返せと言われるかもしれないから言わないでおこう、うん。

「何してるの?」

持ち帰ったオレンジを目の細かい網に詰めていると、子供達お風呂嫌がる問題の発起人たるシルフィから疑問を投げられた。

「前に子供達が湯船に浸かりたがらないって言ってただろ? それでこの果物をお湯に入れたらみんな喜ぶんじゃないかなって」

「へえ………てつきり食べるんだと思ってたよ」

「食べれるらしいけど、今回はお風呂用で」

ちなみに風呂に入れない分は今日のデザート行きだ。

「よし、出来た。これをお風呂に浮かべて入るんだ。オレンジの香りがお湯に移っていい感じになると思う」

とは言ったもののゆずとは違う果物だから色々と未知数だ。最初に入るのはい出しっぺとしたものだろう。

「とりあえず最初は俺が誰かと入ってみて様子を見るよ」

「じゃあそろそろララが帰ってくるから一緒にお願いしていい?」

「了解、じゃあお風呂にお湯張ってくる」

そう言っただけ風呂場に向かいお湯を張り終わるとちやうど玄関から誰かが入ってくる音がする。

おそらくララだな。お風呂をめんどくさがっているララの反応を見れば他の子供たちの反応も予想できるが……喜んでくれると良いな。

そのララだが最初は、

「めんどくさいからヤダ」

とけんもほろろだった頼み込むと折れてくれた。なんのかんの言っただけ新しいお風呂に興味があったらしい、好奇心旺盛な子だからな。

「いつもとおんなじ」

「今から変わるんだ」

不満そうなララを宥めながらさつき用意したオレンジ袋をお湯に入れる。

体を洗っている間に柑橘特有の香りが漂ってきた。

「いいにおい」

「だろ？ペルギウス様のところから貰ってきたんだ」

「へー……」

意外に淡白な反応だ。ひよつとするとお気に召さなかったか……？

「入っていい？」

「ちゃんと泡を流してからな」

「わかった」

そう言うやいなやララは頭からお湯を流して湯船に入ってしまった。

「よっこいせつと……どうだララ？」

俺も追いかけるように湯船に入りオレンジinネットを弄んでい
るララに感想を聞いてみる。

と言っても口の端が上がってるし、悪い感想ではなさそうだが。

「あつたかくていいにおい、前に行った温泉みたい」

やはりご好評のようだ。よかったよかった。

それにしても本当に暖かい……確かゆず湯には保温効果とかもあるんだっけか、似たようなものではあるしこのお湯にもあるんだろうな。

「そろそろ上がるか。最後に肩まで浸かって」

「10数える？」

「ああ」

「わかった……」

めんどくさそうだな。まあ気持ちは分かるが。

「パパ」

「なんだ？」

10数え終わりお湯に沈んでいたララが立ち上がる。その手には

……オレンジ？

「えい」

「ぶわっ！」

甘酸っぱい！これは……オレンジ！

そうかララのやつ手に持ったオレンジを握り潰して果汁を飛ばしてきたのか！なんてコントロール力なんだ！

「びっくりした？」

「した……でも危ないから立ってる人にしちやダメだぞ」

「ん、わかった」

本当にわかってているのかどうかちよつと不安になる返事だな……まあ最低限のラインはわかってる子だし大丈夫だろう。

「じゃあ上がるか」

「わかった」

そう言っただけでララと自分の体を拭き、それぞれで服を着る。というかいつの間にか自分で難なく服を着れるほど大きくなっていて、子供の成長は早いと実感させられる。

「パパ、どうしたの」

「いや、なんでも。それよりこのオレンジ湯は気に入ったかララ？」

「うん、いいにおいだったからまた入りたい」

「そっか、まあまた良いのが手に入ったらな」

「楽しみにしてる」

気に入ってくれたなら何よりだ。風呂が空いたことを伝えるにいくついでにさつきララが潰した果実のタネをアイシャに渡して育てるように頼んでみたりしてもいいかもしれないな。

その後。

子供たちだけでなく大人組にも大変ご好評頂いたので、アイシャが栽培に成功したオレンジが我が家に常備される事になったり、ナナホシが話したのかペルギウスからも詳細を聞かれたりしたのはまた別の話である。

夜更けの侵入者

へ 1 / 1 ページ 次へ

近頃、事務所に侵入者が出るらしい。

侵入者は夜な夜な事務所に侵入し、お茶請けとして置かれているお菓子を持ち去っていくのだそうだ。

そう俺に相談してきたのは受付の……フアリアさんだったか。彼女が出社すると夜中に侵入者が居た形跡があり、食糧庫が荒らされているのだと言う。

社長とアレクはまるで気にするそぶりがないので俺に話したんだそうだ。

確かに最近お茶菓子の減りが早いなーとは思っていたがまさか侵入者が居たとは。秋も深まり……というか北国だから日によつては普通に雪とか降ってきてすごく寒いのに泥棒も大変だ。

まさかヒトガミの仕業なのだろうか。いくらなんでもそこまでコスイ真似はしないよな……？

「とりあえず今晚張り込んでみるから、また何かあったら報告してくれ」

「はあ……よろしくお願いします」

一度家に戻って夜食を用意しまた事務所の食糧庫、その隣室へ戻ってきた。

夜食は張り込みと言えばこれだろうと言う事であんパンもどきと牛乳にした。古き良き刑事ドラマスタイルだ。

ちなみにこの事務所の家主である社長は自室でそれはもうスヤスヤと睡眠中だ。龍族好みのパジャマとご丁寧ナイトキャップまで着け、寝た子を叩き起こすようなプレッシャーを放ちながらリラックスしている。正直羨ましい。

それはそれとして。今日侵入者が来てくれるのかな……俺も歳だ

から連日の徹夜は流石に堪えるしそもそもシルフィたちとのイチャイチャ時間が取れなくなるのは本当に困る。こうして一人であんパンと牛乳をかつ食らっているとしても心細い。

……そもそも侵入者って人間なのかな。ここは街ハズレだしひよつとしたら魔物というセンもあるのではないか。いやそれなら社長が気づくか……。

魔物でなくても幽霊。そう幽霊だ。社長は墓石に腰掛けたりするような人だし死者から恨まれてもおおかしくない。お目にかかった事はないが死霊魔術だってあるんだから夜な夜な墓からパウロとギースが出てきて事務所のお菓子を食べながら思い出話に花を咲かせ……いや無いな。あの二人ならその近くにある酒に手を伸ばすだろう。

なんかさつきから変な方向に思考が散るな。寂しいのかな……なんか窓枠がカタカタ言ってるポルターガイストみたいだし……。

ガサ……ゴソ……

「！」

今までとは違う何かを漁るような物音。間違いない。泥棒がやってきたのだ。やろうぶつとばしてやる！

「誰だ!!」

「っ！」

犯人の手からポトリと落ちる菓子袋。

そいつはまるで小人族のように小柄な……というか子供そのものの姿に青い髪、寒さのせいかな少し赤くなった鼻がチャーミング。ロキシーそっくりだがロキシーではない。この真ん中で分けられた青い前髪は……

「何してるんだ、ララ……」

口元に食べかすをつけたララがそこにいたのだった。

「ごめんなさい」

悪い事をしたというのはわかっているのだろう。開口一番に謝ってくるのはいい事だ。

「でもなんでこんな時間に忍び込むような真似をしたんだ？言ってくれたらお菓子くらい持って帰ったのに」

「あんまりワガママばかり言ってるアルスたちに舐められる」

お、おう。意外とメンツみたいなのを気にするんだな。リニプルあたりの影響か？

「あと忍び込んでない。アレクが夜に散歩してたから着いて行ったら入れてくれた」

マジか。アレクもグルだったのか。

いや時々夜中にシャリーアを巡回してるみたいだしそこにララがついてきたらそりや入れるか……。

「はあ……俺はともかく社長たちにあんまり迷惑はかけるなよ」

「迷惑などではない」

うおっ!?

社長!?!寝てたはずなのに！

「また来たのか」

「うん、ここのお菓子美味しい」

「そうか、ならまた持って帰るがいい」

「そうする」

「オルステッド様、あんまり甘やかさないてください」

またって二回も言ったな。そうかだから社長もアレクも気にしてなかったのか。犯人はララだったから気にする必要がないと思われていたのだろう。

「む……」

「そんな顔をしてダメです。もしかして家までララを送ってくださいました?」

「ああ」

なるほど。こんな夜中に歩くななんて何があったらどうするんだと思っただが行きは北神帰りは龍神ならルイジェルドの近く並みに安全な事だろう。

「けどなララ、あんまり夜中に歩き回るもんじゃないぞ。もし様子を
見に行つてララが居なかつたらみんなすごく心配するんだからな？」

「うん、分かった。もうしない」

「よし。じゃあお土産持つて帰るか」

「いいの？」

「みんなで分けるんだぞ」

俺だつて鬼じゃない、悪いと分かつていて反省も十分しているなら
これ以上叱る必要もないだろうし。

ただ今度からはもうちよつとお土産の甘いもの比率を増やそうか
などかは思つたりした。

その後。

二人で仲良く手を繋いで家に帰つたら門の前に腕組みをしたエリ
スと半泣きで杖を構えたロキシーが立っていた。

なんでも夜中におしっこで起きたジークとトイレまで連れて行つ
てあげたルーシーが子供部屋から抜け出しアレクに着いていくララ
を発見、三人の母に報告したんだそうだ。

悪い事は隠そうとしてもバレる。尻叩きの刑に処されるララを見
ながら俺はその事実を再確認したのだった。

くしゅん！

たまの休み、もうすぐ正午になろうとしている穏やかな時間。そんな時間をいい香りが漂ってくる庭を眺めながらぼんやりと消費している。

ちなみにいい香りの正体はアイシャが育てているハーブだ。そろそろ香る時期だと言っていたが今日らしい。

我が家の家庭菜園の支配者であるところのアイシャは定期的に手を替え品を替え色々試しているみたいだが、今のところ変なのが生えてきて我が家の庭を乗っ取ったという事もない。

ああいや君の事じゃないよビートくん。いつもお米を守ってくれてありがとう。

「なんだかスーツとする香りだな、お茶に入れたら美味しそうだ」

前世のハツカみたいなものだろうか。

まああつちのもこつちのもハーブ類は全く詳しくないけど。

「おちや？おちやにお草入れるの？」

そんな呟きを拾ったのは俺の膝の上を指定席にしているクリスマスだ。

「そうだよクリスマス、いつも飲んでるお茶だって葉っぱをお水につけて作ってるんだ」

「うそー！」

「嘘じゃないさ」

まあ厳密にはお湯だけど。ああそっぴいえば水出しつてのものもあるんだっけか？

「ホントにお草から出来てるの？」

「本当だよ、今度白ママかアイシャお姉ちゃんに見せてもらおうか」

「うん！」

俺が見せてもいいんだけどシルフィにはボクが淹れてあげるのに……と残念そうに言われちゃうし、アイシャに至ってはMOTTAI NAIと言い放たれた。多分下手なんだろうな。うん。

「それにしても本当にいい匂いだな。なんてハーブなんだろ。もうちよっと近くで見てもみようか」

クリスを抱っこしてハーブの方に近づく。万が一トウレントだった時のために予見眼をカツ開きながらだが……。

良かった。ただのハーブだ。近づくときちよつと匂いがキツいかな、案外縁側から眺めてちょうどいいくらいのを選んで植えてるのかもしれない。

「……………くちゅん！」

「うん？」

「ぱぱ、お鼻むずむずする。ずびび」

「ああダメだよクリス、鼻水吸っちゃ。ほら、これにチーンしな」

ちり紙を取り出してクリスの鼻にあてがって鼻をかませる。はい、チーン。

それにしてもなんで急に？とりあえず解毒解毒と。

「……………くちゅん！」

「ダメか」

「おめめかゆい」

一旦は治ったがまたくしゃみを始めてしまった上になんか目も充血し始めた。ああダメだよクリス、おめめ悪くなっちゃうよ。

あ、もしかしなくても花粉症なのかこれ。

そう思っただけで室内に撤退して再度解毒をかけてやるとクリスの症状はおさまった。やっぱり花粉症だなこれ。

となると根治は難しいか……。症状自体は魔術で治せるけど、ハーブが香るたびに同じ症状がでるだろうし。

アイシャには申し訳ないけどこのハーブはもう植えないでもらおうか。

とりあえずクリスの顔を水で洗って……………ああ服も変えた方がいいかな。もうお風呂に入れてしまおう。

クリスをお風呂に入れ終わり、新しい服に着替えさせてからリビングに戻る。

「ルーデウス……私、もう……くしゅん!!」

「パパ……くしゅん!」

「……くちゅん!」

そこは死屍累々だった。

そうか、エリスとアルスもダメなのか。ならこれはもう完全に遺伝だな。

「あーお兄ちゃんどうしよう助けて! エリス姉とアルス君にハーブの収穫手伝ってもらったら急にこうなってああクリスちゃんも!」

うーん、アイシヤがこうも慌てるのを見るのは久しぶりな気もするな。

そっか、この世界アレルギーの概念ないのか。そりや慌てるよな、解毒魔術効かないし。

「とりあえずアイシヤ、そのハーブを台所に持ってつてくれ。3人は俺が面倒を見るから」

「わ、わかった。大丈夫? 大丈夫なの?」

「大丈夫、大した事じゃ無いしお前のせいでも無いから」

そう言つてアイシヤ……というか諸悪の根源になったハーブを台所に隔離する。

そして今日だけで何回目になるのか解毒魔術と。

「助かったわ!」

「かゆい……」

「搔いちゃダメだアルス。エリス、アルスをお風呂に入れてあげてくれ。お湯は張つてあるから」

「わかったわ! 行くわよアルス」

「ちゃんと服も替えるんだよー!」

エリスがアルスと手をつないでお風呂場へ向かう。あっちは任せでも大丈夫だろう。

「あの一お兄ちゃん」

ハーブを持って行ったアイシヤがおずおずと戻ってきた。叱られるとでも思っているのだろうか。

「あー……アレルギーって言ってな、特定の花粉とかハーブがダメな

人っているんだ。別にお前が何かしたわけじゃないよ」

「うん……ごめんねクリスマスちゃん。大丈夫？」

「へいき！」

「でもあのハーブは封印な」

「わかった……あ、お茶とか料理にも使わない方がいいかな？」

「使ってもいいけど、エリス達には別のにした方がいいかな。俺は後でもらうから淹れてくれ」

「アイシヤおねえちゃん、おちやいれてるの見たい！」

「じゃあ一緒にキッチンに……って今はダメか、ティーセット持ってくるねー！」

そう言ってアイシヤは台所へティーセットを取りに行った。

そろそろエリス達も戻って来るだろうし、今日は5人で午後のお茶会とでも洒落込むか。たまには穏やかなのもいいものだな。

しるしを刻ませて

「んー…むー…」

先ほどから俺の腕の中でシルフィがむーむ行っている。

別にケンカしてむくれてさせてしまったわけでも、喉に何か詰まっ
てむせてしまったのでもない。ついでに言えばそういうプレイをし
ているのでもない。

まあ彼女の口はいま別のもので塞がってるし、二人とも上には何も
着ていないからおおむね間違ってもない。

「ん……ぷはあ……」

「どう？」

「ついてない……」

心底残念といった風にシルフィが言う。あんまり真剣な様子につ
いつい笑いがこぼれてしまった。

「笑う事ないじゃないか」

「ごめんごめん、可愛くてつい。でもそんなにつけたいのか？キス
マーク」

そう、シルフィは俺の体にキスマークをつける事を所望しているの
だ。

なんでも三日前に俺がつけたキスマークのせいで揶揄われてし
まったそう。ゆうべはお楽しみでしたね、とかどこぞの宿屋みたい
な事でも言われたのだろうか。あのお姫様はそう言うこといいそう
だ。

とはいえ原因は服を着ても見える位置に付けてしまった俺。恥
ずかしい思いをさせてしまったとあらば仕返しは甘んじて受けねば
なるまい。

まあ、そんな経緯がなくてもシルフィのお願いならなんでも聞く
し、シルフィも恥ずかしかったってだけで嫌そうではなかったが。

ともかくそんなわけで、今回はピロートーク代わりに彼女のなすが
まま口づけを受けている。

正直こそばゆいし、必死なシルフィを見てるとまたムクムクとたま

らない気持ち湧いてくるが我慢だ。せっかくシルフィが甘えてくれるのだから好きなようにしてもらおう。

「んんん……いやっぱり上手くないや、ルディはどこでつけ方を覚えたの？」

首筋からくちびるを離れたシルフィが言う。口までかかる橋が艶めかしい。

どこで覚えたか。それはもちろん生前にインターネットでなのだが、その事はできれば言いたくない。

「エリナリーゼさんがたまに教えてきたんだよ、聞いてもないのに」

なので、嘘ではないギリギリのラインで誤魔化す事にした。エリナリーゼから猥談を振られる事があるのは本当だし。ルーデウスうそついてない。

「あ、エリナリーゼさんに聞いてみたら良いんじゃないか？」

そういうの教えるのも上手そうだしな。

「うーん、でもおばあちゃんは何でかボクにそういうの教えるの嫌みたいなんだよね、そのままのあなたの方がルーデウスは興奮しますわ！だってさ」

さすが孫、声真似が上手だ。

そしてエリナリーゼも俺の事をよく分かっている。確かに俺はありのままのシルフィが一番好きだ。

シルフィがエリナリーゼに習った技術で俺の事をひーひー言わせたい！とか言い出したら思うようにやらせてあげたいが、当のエリナリーゼにその気が無いなら叶わぬ夢か。

話題が逸れた。

インターネットなんかもう10年以上も前の記憶だし、今となっては強く吸うとシルフィの白い肌を赤いあざができる程度の認識で。もちろんそれはシルフィにも共有しているが、肌質の違いか、シルフィがかなり強めに吸ってもキスマークはつかないらしい。

さて、どうしたものか。

「ねえルディ」

「うん？」

「お手本見せてよ」

やや釈然としない様子のシルフィ。そうお願いしてきた。真っ赤なお顔が大変眼福です。

「えっと……じゃあ腕貸して」

「う、うん、どうぞ」

自分で言っただけで照れてしまっているシルフィから腕を預かって、恭しく口づける。

細くてやわらかい。繊細で、ちよつとした事でこわれてしまいそうなほどに。改めて大切にしなければならぬと実感させられる。

とまあ、それは今はいいか。俺の口元に注目しているシルフィの方を見ながら強く吸い上げて口を離すと白い手首に赤い点が浮かびあがる。

「簡単そうなのにね」

なんでできないんだろう、と口を尖らせるシルフィ。

「できなくても困らないし、別にいいんじゃないか？」

「でもルディばかりじゃないか。ボクにもつけさせてよ」

「つけさせてよって言われてもなあ……」

俺だって出来ることならつけさせてあげたいし、なんだったらつけて欲しいのだが、つかないものはどうしようもない。

まあ必死になるシルフィが可愛いからこのままでも良いかなー、いやむしろこのままでもいいなーと思う気持ちがないでもないのだが。

そんな事を思っていると、顔に出てしまっていたのかシルフィにジト目で見られていた。

「ええっと……シルフィエツトさん？」

「ねえルディ、肩貸して？」

何かを思いついたような顔でシルフィにそう言われた。笑顔だが謎の迫力がある、逆らってはイカンやつだこれ。

「う、うん、どうぞ？」

そう思っただけで肩を差し出す。シルフィは深く息を吸い込んで、

「いっ……!?!」

ガブリと俺の肩に食らいついた！

血は出なかつたけど、急に歯を立てられてビックリした。

「……なんか違うね」

「そりやそうだよ……」

見なくても分かる。今俺の肩にはくつきりと歯型が残っている事だろう。

可愛いからってつい調子に乗ってからかいすぎたな、反省。

「ごめんね、痛かった？」

「いや全然、ビックリしただけ」

シルフィも勢いでやった事なのだろう。シユンとする彼女の頭をなでて宥ると、エヘへと顔を綻ばせた。

「それに積極的なシルフィも可愛かったしな」

「……もうー！」

むくれたようにそっぽを向いてしまったシルフィを抱きしめながらベッドに倒れ込む。

ぼふん、と軽い音を立てながら俺たちの体重をベッドが受け止めてくれた。こだわって選んだ甲斐があったな、うん。

「このまま寝たら風邪ひいちゃうよ？」

「ひいても治してくれるだろ？」

「だーめ！ちゃんと着るの！」

「はーい」

カッコいい事をいって誤魔化そうと思ったが、我ながらなんとも締まらない事だ。

明日になったらエリナリーゼにキスマークの付け方講座を開いてもらうようにでも頼もうか、そんなことを思いつつ、服を着た俺はシルフィの体温を感じながら眠りについた。

通り雨と念話

食品店の外から聞こえて来た轟音を聞いてボクが最初に思った事は、しくじったな、だった。次に急いで帰らないと思いい、最後に両手に提げている今日の晩御飯の食材を思い出して諦めた。

「雨なんて、珍しいな」

滅多に雨が降らない冬の北方大地なのに、店の外を見ればざあざあど横なぐりの雨が道を叩いている。

誰かが水聖級魔術を使ったというならこんなにも激しい雨が降るのはわかるけど、街中でそんな魔術を使うような人はまず居ないと思う。だからこれは本当に偶然降ってきた雨なんだろう。

仕事や学校に行ってるルデイたちが帰ってくる時に滑って転んだりしないか心配だ。

「早く止まないかな……」

家を出る時は青空だったから傘は持ってきていないし、魔術で散らしてしまうのはあまり良くないとルデイもロキシも言っていた。

かといってこの雨の中を帰ろうにも、そんな事をすればさつき買ったばかりの食材がダメになってしまうのが目に見えてる。

だから、今は待つしかない。

幸いにも通り雨だったらしい、本当に珍しいや。

「そんな事より急がないと……!」

急ぐのには理由がある。

と言ってもそんな重大な理由というわけじゃない。ただ今日は朝からいい天気だったから、洗濯物を多めに干しておいたのだ。

けど、今から帰ってももうびしょびしょになってしまっているだろう。

今日は家にゼニスさんとリーリヤさん以外はララたちしか居ないから、リーリヤさん一人で取り込むにはちよつとキツイ量のはズだ。

だから少しでも早く帰って洗い直しを手伝わないといけない。

そんな事を思いながら道が凍ってしまわないように水切りをしている人々を横目に家まで急ぐ。早く帰らないと晩御飯までに間に合わない……！

「ただいまー！」

「おかえりなさいませ、シルフィエツト様」

「おかえり、白ママ」

「あれ？リーリヤさんにゼニスさん？ララも？」

買ってきた物を脇に置いて先に洗濯物を片付けてしまおうと居間に入ると、今朝干しておいたハズの洗濯物を畳んでいるリーリヤさん。そしてテーブルを挟んで真向かいのソファーに座るゼニスさんの膝の上で珍しく手伝っているララに出迎えられた。

ひよつとしてリーリヤさんが取り込んでくれたのかな。足を悪くしてるのに申し訳ないな……。

「ありがとうございます、リーリヤさん」

「いえ、お礼でしたらララ様に」

「ララに？」

「はい、ララ様が雨が降るから洗濯物を取り込んだ方がいいと」

「本当かな。時々見透かした事を言うような子ではあるけど……。

「ばあちゃんもレオが雨が降りそうって教えてくれた」

「へ？」

「リーリヤばあちゃんは足怪我してるから手伝ってあげてってゼニスばあちゃんが」

「そっかあ……ありがとね、ララ」

にんまりと、最近ますますルディに似てきた笑みを浮かべながらゼニスさんに頭を撫でられているララによると、アルスとジークもララが取り込んでいるのを見て自分から進んで手伝ってくれたという。

二人は疲れてレオを枕にそのまま寝てしまったらしい。起きたらレオ共々いっぱい褒めてあげないとね。

「ララ、リーリヤおばあちゃんのお手伝いしてくれたから、お礼にあとで好きなオヤツをなんでも作ってあげるよ。何が良い？」

「んー……………甘いやつがいい」

「じゃあホットケーキ焼いてあげる」

「楽しみ」

さらに笑みを深くしたララを可愛く思いながらリーリヤさんとボクとララの三人で洗濯物を畳み終えた。

ちょうどその頃に起きてきたアルスとジークの分も含めてホットケーキを焼きながら、ルデイたちが帰ってきたらこの事を教えてあげようと思った。ルデイもロキシもエリスもきつと驚いて、そして嬉しそうにするんだろうな。

子供の成長は本当に早い。みんながどんな大人になるのか、今からすごく楽しみだな。

狂剣王の小さな冒険

それは、ルーデウスたちがアスラ王国王位争奪戦から帰還してしばらく経ったある日のことである。

魔法都市シャリーアの商業区にその女は居た。

両の腕を組み、不機嫌そうな——見る人が見れば単に悩んでいるだけだと分かる顔でグレイラット家が鼻屑にしている服飾店の前に立ち尽くす赤毛の女。その名も……

「いつまでそうしてるのエリス、早くしないと日が暮れちゃうよ」

「そうですよ、服を選んで欲しいって言ったのはエリスじゃないですか」

「そ、そうね……けど私似合う服、あるかしら……」

狂剣王エリス・グレイラット。彼女は剣士として敵に合間見えるよりも緊張した面持ちで服飾店の門をくぐった。

「まずはボクたちみたいなの服を試してみたいんだよね？」

「ええ」

事の発端はエリスがシルフィに服を見立てて欲しいと頼んだ事だった。

自分の服のレパートリーが少ない事を自覚していたエリスは、センスが良く、ルーデウスの好みを熟知しているシルフィに頼んで服を選んでもらう事にした。そしてふたりが予定を組んでいる時に通りがかったロキシも加わり3人で服飾店に行く事になった次第である。

ちなみにエリスは妊娠中なのに大丈夫かと心配したが、ロキシがたまには散歩でもしないと体が鈍ると主張した事とシルフィがいざと言う時でもなんとかすると説得した事で同行する運びとなった。多数決の勝利である。

そのような事をエリスが回想しているうちに目的の場所に着いた。この服飾店の中でもやや高級志向のフロアである。

「ボクはいつもこの辺りの服を着てるかな。ロキシシーは？」

「わたしはもう少しカジュアルな服を選んでいますね」

そう言いながらロキシシーは少し離れた場所から一着の動きやすそうな服を持って来た。

「エリスはどっちの方が好み？」

「そうね……」

またしても腕を組んでエリスは考える。

どちらの方がルーデウスの好みにより近しいか。

まずシルフィの服。全体的にゆったりした服が多く、自らがロアの屋敷に住んでいた頃に着ていた服の延長だろうと分かる。あの頃のルーデウスは良く自分のスカートをめくろうとしていたし嫌いではないはずだ。

次にロキシシーの服。元冒険者だというロキシシーらしく機能性を重視しているのだろう、ポケットや留め具が随所に付いている服は数年間冒険者をしていたエリスにとって馴染み深く、それはルーデウスも同じだろう。

「どっちが良いかしら……」

「試着してみたらどうでしょう」

「試着？」

「はい、向こうに試着室がありますから着てみたらどうですか？」

ロキシシーが指差す先、試着室と書かれた看板のかけられた小さな個室には、珍しい姿見鏡があった。

「良いわね！」

物は試し、考えるより先に行動する方が性にあっていうエリスは二人に勧められた服を両手に試着室の中へと入っていった。

それから暫くして、

「じゃあ次はこれ！着てみて！」

「その次はこれです！」

「わ、わかったわ……!?!」

試着室は二人によるエリス着せ替え大会とでも言うべき様相を呈

していた。

切欠はシルフィだ。

彼女はエリスが元々持ち込んだ服を試着して購入しようか迷っている間に「これも似合いそうだから着てみてよ！」と次なる服を一式持ってきた。それを見たロキシシーもまた次の服を持ち込み、さらにシルフィが……と連鎖して今に至る。エリスはなすがまま二人に着せ替えられていた。

背丈や体格のまるで違う、しかし最上の素材を自由に着飾る機会を得た結果の暴走である。

「ねえ二人とも、そろそろ良いんじゃないかしら……?」

「……あ」

茹で上がった顔をそのまま表す声色に二人はようやく正気を取り戻した。

しまった、やり過ぎたと思った時には既にエリスの羞恥心は限界ギリギリに到達していたのである。

「そ、そうだね。ゴメン」

「じゃあエリスが気に入った服を選んで下さい……」

「どれにしようかしら……」

「ふふっ……」

ニマニマとした笑顔を顔に貼り付け、両手に紙袋を提げたまま跳ねる様に家路に着くエリスと何故か照れた様な顔でその後ろに続くシルフィとロキシシー。

「どうしたのよ?」

二人の方を振り返り不審がるエリスを見て頬をかきながらシルフィが口を開いた。

「いや、だってね、自分で選んだ服だけじゃなくてボクたちの選んだ服も買ってくれたからさ」

シルフィと顔を見合わせていたロキシシーも追従する。

「そうですね……『二人が選んでくれた服だもの！』は中々の殺し文句です」

「でも本当にそう思うもの。だからきつとルーデウスも喜んでくれるわよね？」

「ええ、きつと」

「間違い無いよね」

大切なたからものを扱うように宝物を抱きしめて、笑い合いながら雪降る道を大切な人の待つ家へ帰る三人。

着飾ったエリスを見て、想い人がどんな感想を抱くのか。

それを語るのは無粋というものだろう。

龍神は駄々っ子には勝てぬ

「……」

俺は今、かつてない危機に直面している。

このような危機はこれまでに無かった。ゆえにどのような対処をすれば良いのか、皆目見当もつかん。

……これは難敵だ。ともすればラプラスにさえ匹敵し得るかもしれない。

「ねえー！オーステさま、ねえー！」

「む……」

本当にどうしたものか。

幼子の世話など、したことが無いからな。

改めて、この先どうすべきかを考える。

今、俺の頭にしがみ付いているこの子の名はローランド。ルーデウスの長女ルーシーの息子で、年齢は5歳。ルーデウスが誕生祝いをシャリーアで行うと言っていたので間違いは無いはずだ。

そしてそのローランドは、先日母と祖父に連れられて事務所へ挨拶に来てくれた時にプレゼントとして贈った竜革の靴を履いて、再び此処へ遊びにやって来た。

それ自体は何も問題は無い。転移魔法陣の部屋や武器庫など子供が入っては危ないような場所は施錠してある上、この子は先ほどから俺にまとわり付くばかりで他には然程の興味を示していない。この分ならば俺が目届く範囲で見守っていれば危険はないだろう。

問題なのは今この事務所には俺とローランドしか居ない事、そしてこの子は一人でこの事務所までやって来てしまった事だ。

数日前、ローランドは両親に連れられてミスからこの事務所を経由してグレイラット邸に向かった。そして日を改めて再び訪ねて来た事で道を覚えてしまったようだ。

それだけならば両親に似て利発な子だと言えるのだろうが、5歳の子供が出先の街を一人で出歩くというのは良くない事だろう。

「ローランド」

「はいー」

元気な返事だ。恐らく機嫌が良いのだろう。

だが子供心は移ろいやすく、そして傷つきやすい。いつかルーデウスがそんな事をしみじみと言っていた覚えがある。

なので慎重に言葉を選びつつ、早く親元に返してやらなければならぬ。

「そろそろ帰った方がよいのではないか？」

「イヤーーッ!!」

失敗したようだ。

ますます力を込めてしがみ付かれてしまった。子供の力などでは龍聖闘気はビクともしないが、それでもまだ帰りたくないという主張は全身から伝わった。

「親が心配しているのではないか？」

「しんぱい……?」

「……お前の身を案じているのではないか？」

「あんじ……?」

難しいか。思えばこれくらいの歳の頃だったルーシーも俺の説明を聞いても首を傾げる事が多かった。恐らく俺は呪いを差し引いても子供の相手と言う物が苦手なのだろう。

それでも俺は可能な限り速やかにこの子をグレイラット家に帰してやらなければならない。きつと今頃は心配したルーデウス達があちこち探し回っているだろうからな。

「ねえオーステさま、ずっとなにかいてるの？」

「むっ」

「ママがおしえてくれるのとは、ぜんぜんちがうやー!」

俺の顔にペタペタと手を伸ばしながら、ローランドがそんな事を尋ねて来た。

この書類は人間語ではなく龍神語で書いている。かつてはヒトガ

ミの使徒対策としてだったが、今やほとんどルーデウスの観察日記と化しているため、誰かに読まれても困るといいうのが実情だ。

「……そうだな、これは日記のようなものだ」

「につきーママがぼくにもにつきをかきなさいって言うんだ！」

今度持つて来てあげる！とローランドは無邪気に言うが、恐らく日記を書く前に叱られて、嫌な思い出しに残らないのではないだろうか。

だが、

「そうか、楽しみにしていよう」

「うん！」

それでも、前向きに約束できる事は楽しい。

その答えに満足したのか、ローランドは俺の頭から梯子のように降り、今度は膝の上に陣取った。珍しい文字を間近で見たいのだろうか。

……いつでもローランドを送って帰れるように、今のうちに兜を被っておくでしょう。

「?どうしておかおかくしちゃうの?」

「俺の顔は人から恐れられる。だがお前の祖父二人が作ってくれたこの兜のお陰で驚かれる程度で済む」

「へー……でもママ言ってたよ! オーステさまはすごくやさしいひとだって! おじーちゃんももしかしたらこわいかもしれないけど、やさしいひとだからだいじよぶだよって言ってた!」

二人がそんな事を。あるいはルーデウスは自分の子孫に俺の呪いが効かないか確かめたかったのかもしれないが。

呪いと言えば、今更かもしれないが、この子は俺と居て楽しいのだろうか。つまらなくはないだろうか。

恐ろしくはないのだろうか。

「お前は俺が恐ろし……怖くはないのか?」

「どうして?」

「少し、気になってな」

「こわくないよ?」

「……そうか」

「うん！」

胸が暖かくなるような満面の笑みだった。

子供からこんな笑顔を向けられる事はこの200年弱が初めての経験で、どう返せばいいのか分からない。

答えに窮している内に、遊び疲れたのかローランドの瞼が重くなってきたようだ。

……いま俺にこの子に返してやれる事といえば、今日という日が悪い思い出にならないようにやはり早く家に送ってやるくらいだろう。

「ローランドよ、やはり、そろそろ帰った方がいい」

「えー……」

「またいつでも遊びに来るがいい。今度は家族と一緒に」

「はーい……」

やや真剣に諭せば、渋々といった様子ではあるが分かってくれたようだ。

兜は被ったまま、膝の上から降ろしたローランドと手を繋いで事務所を出る。

そろそろ日が傾こうとしているが、今のうちに帰して口添えをしてやればそれほど怒られずに済むだろう。

ローランドを家に送って帰る途上でルーデウスと遭遇した。

聞けば傭兵団からローランドが事務所へ向かったと言う報告を受けてこちらへ向かうところだったらしい。

遊びに来ただけだから怒らないでやってくれと言うと、善処しますと微妙な顔をしていた。恐らくルーシーが怒髪天をついているのだろう。責任感の強い子だったからな。

数日後。やはりローランドは怒られたらしく、彼が見せてくれた日記には、勝手にお出かけしてすごく怒られた、でもオーステ様とお話

できて楽しかった、また遊びたいと書いてあった。
良い思い出になったのなら、何よりだ。